

じょうびら いせき
城平遺跡

跡江保育所整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2017

宮崎市教育委員会

じょうびら いせき
城平遺跡

跡江保育所整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2017

宮崎市教育委員会

序 文

本書は平成 25 年度、26 年度に実施された、城平遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡が所在する跡江地区には、国指定史跡「生目古墳群」をはじめとした多数の遺跡が所在しています。また、こうした歴史的遺産を後世に伝えるため、本市では開発事業に伴う発掘調査・保存活動に取り組んでいるところです。

今回の発掘調査では古墳時代前期の竪穴建物群が検出されました。特に、これまで跡江地区で不明瞭であった 3 世紀中頃の居住域が確認されたことから、生目古墳群成立以前の様子を知る貴重な成果となりました。本書の成果が広く市民のみなさまに活用され、地域の歴史や文化に親しむ上での一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力頂いた皆様に感謝申し上げますと共に、今後とも本市の文化財保護行政にご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成 29 年 3 月

宮崎市教育委員会
教育長 二見 俊一

例 言

1. 本書は平成25年度、26年度に実施した、跡江保育所整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、宮崎市教育委員会文化財課が本市福祉部子ども課から依頼を受け実施した。
3. 本調査に伴う文化財保護法の手続きは以下の通りである。

(第1次) 工事通知 (同法第94条第1項)	平成25年7月22日付	宮子第394号
着手報告 (同法第99条第1項)	平成25年9月4日付	宮教文第385号
完了報告	平成25年12月19日付	宮教文第1134号
発見通知 (同法第100条第1項)	平成25年12月19日付	宮教文第1135号
保管証	平成25年12月20日付	宮教文第1143号
(第2次) 工事通知 (同法第94条第1項)	平成26年9月10日付	宮子第485号
着手報告 (同法第99条第1項)	平成26年12月4日付	宮教文第749号
完了報告	平成26年12月17日付	宮教文第749号2
発見通知 (同法第100条第1項)	平成26年12月16日付	宮教文第749号1
保管証	平成26年12月24日付	宮教文第749号3

4. 現地における発掘調査、室内整理作業は以下の期間実施した。

発掘調査：平成25年8月19日～平成25年12月13日（第1次）

平成26年12月1日～平成26年12月10日（第2次）

整理作業：平成26年9月16日～平成27年1月22日

平成27年9月24日～平成28年2月3日

5. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会 文化財課

(平成25年度)

調査総括	課長	橋口	一也
	課長補佐	山田	典嗣
	副主幹兼埋蔵文化財係長	島田	正浩
調整事務	主任技師	秋成	雅博
調査担当	技師	河野	裕次
	囑託員	川野	誠也

(平成26年度)

調査総括	課長	橋口	一也
	課長補佐	日高	貞幸
	副主幹兼埋蔵文化財係長	島田	正浩
調整事務	主査	秋成	雅博
調査・整理担当	技師	河野	裕次
	囑託員	船石	涼代

(平成27年度)

調査総括	課長	日高	貞幸
	課長補佐	小窪	裕俊
	埋蔵文化財係長	井田	篤
調整事務	主任技師	河野	裕次
整理担当	〃	〃	〃
	囑託員	沼口	常子

(平成28年度)

調査総括	課長	日高	貞幸
	課長補佐	小窪	裕俊
	埋蔵文化財係長	井田	篤
調整事務	主任技師	河野	裕次
整理担当	〃	〃	〃
	囑託員	沼口	常子

6. 現地における測量はトータルステーションを用いて行ない、個別の遺構実測図は1/20・1/10で作成した。また、個別遺構の写真撮影については6×7判モノクロ・リバーサルフィルムと35mmモノクロ・リバーサルフィルムを併用した。
7. 現地における実測は河野、川野が行なった。
8. 現地における空中写真撮影は衛星スカイサーベイ九州に委託した。また、出土炭化物の年代測定は佛古環境研究所に依頼した。
9. 本書に掲載した遺物の実測及びトレースは河野、沼口、整理作業員が分担して行ない、一部を朝イビソク宮崎営業所に委託した。
10. 本書における遺構略号は以下の通りである。
SA：竪穴建物 SB：掘立柱建物 SC：土坑 SE：溝状遺構 SH：柱穴
11. 本書に掲載した遺物実測図の縮尺は、土器・須恵器 1/3、剥片石器 2/3、礫石器 1/2、鉄器 1/2 であり、その他のものについては図中に示している。
12. 本書に掲載した遺物実測図の表現については、以下の通りである。
強い稜線：実線 弱い稜線：破線 被熱の範囲：網掛け 磨面の範囲：矢印
調整の表現：以下の通り



13. 本書における土色の表記は「新版 標準土色帳」に依拠した。
14. 本書で示す方位は全て真北を示す。
15. 発掘調査により出土した遺物、及び調査における図面、写真、記録等は宮崎市教育委員会で保管している。
16. 本書の編集は河野が行なった。

本文目次

第 I 章	遺跡の位置と環境	
第 1 節	地理的環境	1
第 2 節	歴史的環境	1
第 II 章	調査に至る経緯と調査の経過	
第 1 節	調査に至る経緯	3
第 2 節	調査の経過	3
第 III 章	1 次調査の成果	
第 1 節	調査成果の概要	5
第 2 節	基本層序	5
第 3 節	古墳時代の遺構と遺物 (A 区)	5
第 4 節	古墳時代の遺構と遺物 (B 区)	42
第 IV 章	2 次調査の成果	
第 1 節	調査成果の概要	51
第 2 節	古墳時代の遺構と遺物 (2 次)	51
第 V 章	放射性炭素年代測定	53
第 VI 章	まとめ	57

挿図目次

第 1 図	周辺遺跡	2
第 2 図	調査対象範囲	4
第 3 図	調査区削平状況、基本層序	6
第 4 図	遺構配置図	8
第 5 図	竪穴建物 2 実測図、炉実測図、 出土遺物実測図	9
第 6 図	竪穴建物 3 実測図、出土遺物 実測図①	10
第 7 図	竪穴建物 3 出土遺物実測図②	11
第 8 図	竪穴建物 3 出土遺物実測図③	12

第 9 図	竪穴建物 4 実測図	13
第 10 図	竪穴建物 4 出土遺物実測図	14
第 11 図	竪穴建物 6 上層土器溜まり 実測図	15
第 12 図	竪穴建物 6 上層土器溜まり 出土遺物実測図①	16
第 13 図	竪穴建物 6 上層土器溜まり 出土遺物実測図②	17
第 14 図	竪穴建物 6 上層土器溜まり 出土遺物実測図③	18
第 15 図	竪穴建物 6 上層土器溜まり 出土遺物実測図④	19
第 16 図	竪穴建物 6 上層土器溜まり 出土遺物実測図⑤	20
第 17 図	竪穴建物 6 上層土器溜まり 出土遺物実測図⑥	21
第 18 図	竪穴建物 6 上層土器溜まり 出土遺物実測図⑦	22
第 19 図	竪穴建物 6 上層土器溜まり 出土遺物実測図⑧	23
第 20 図	竪穴建物 6 上層土器溜まり 出土遺物実測図⑨	24
第 21 図	竪穴建物 6 上層土器溜まり 出土遺物実測図⑩	25
第 22 図	竪穴建物 6 上層土器溜まり 出土遺物実測図⑪	26
第 23 図	竪穴建物 6 上層土器溜まり 出土遺物実測図⑫	27
第 24 図	竪穴建物 6 上層土器溜まり 出土遺物実測図⑬	28
第 25 図	竪穴建物 6 上層土器溜まり 出土遺物実測図⑭	29
第 26 図	竪穴建物 6 上層土器溜まり 出土遺物実測図⑮	30

第 27 図	竪穴建物 6 上層土器溜まり 出土遺物実測図⑯	31
第 28 図	竪穴建物 6 上層土器溜まり 出土遺物実測図⑰	32
第 29 図	竪穴建物 6 上層土器溜まり 出土遺物実測図⑱	33
第 30 図	竪穴建物 6 実測図、 出土遺物実測図①	36
第 31 図	竪穴建物 6 出土遺物実測図②	37
第 32 図	竪穴建物 7 実測図、 出土遺物実測図	38
第 33 図	掘立柱建物 10 実測図	40
第 34 図	A 区溝状遺構実測図	41
第 35 図	包含層出土遺物実測図	42
第 36 図	その他出土遺物実測図	42
第 37 図	溝状遺構実測図、 出土遺物実測図	51
第 38 図	包含層出土遺物実測図	52
第 39 図	暦年較正結果	56

表 目 次

第 1 表	竪穴建物一覧表	39
第 2 表	出土土器観察表①	43
第 3 表	出土土器観察表②	44
第 4 表	出土土器観察表③	45
第 5 表	出土土器観察表④	46
第 6 表	出土土器観察表⑤	47
第 7 表	出土土器観察表⑥	48
第 8 表	出土土器観察表⑦	49
第 9 表	出土石器計測分類表①	50
第 10 表	出土鉄製品計測分類表	50
第 11 表	出土土器観察表⑧	52
第 12 表	出土石器計測分類表②	52
第 13 表	測定試料	53
第 14 表	測定結果	53

図 版 目 次

図版 1	調査区空中写真	60
図版 2	調査区空中写真、 古墳時代の遺構と遺物 (A 区) ①	61
図版 3	古墳時代の遺構と遺物 (A 区) ②	62
図版 4	古墳時代の遺構と遺物 (A 区) ③	63
図版 5	古墳時代の遺構と遺物 (A 区) ④	64
図版 6	古墳時代の遺構と遺物 (A 区) ⑤	65
図版 7	古墳時代の遺構と遺物 (A 区) ⑥	66
図版 8	古墳時代の遺構と遺物 (A 区・B 区)	67
図版 9	古墳時代の遺構と遺物 (2 次)	68

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

本書で報告する城平遺跡は、宮崎市大字跡江 2007 番地に所在する。宮崎平野を流れる大淀川の下流域には、この川によって形成された沖積平野が広がっており、その中には大小の微高地が島状に点在している。本遺跡が立地する微高地は、市街地中心部から北西に約 6km の、中流域を東流してきた大淀川が大きく南へ流れを変え部分の右岸に所在している。この微高地は、国指定史跡「生目古墳群」が立地する丘陵の東側に接続するような形で広がっており、南側には大きく二つの谷（迫）が入り込んでいる。本遺跡はこの二つの谷に挟まれた岬状の微高地に立地する。

第2節 歴史的環境

城平遺跡が所在する微高地周辺は、縄文時代から近世にかけての遺跡が所在する、市内でも有数の遺跡密集地となっている。縄文時代の遺跡としては、跡江丘陵の東南端部に所在する跡江貝塚がある。本貝塚はハイガイを主体とする上層とシジミを主体とする下層に分かれており、縄文時代早期の貝殻文系土器や押型土器、塞ノ神式土器、前期の轟式土器等が出土している。約 9000 年前のいわゆる縄文海進期には、現在の標高 10m 以下の沖積地は海面下に沈んだと考えられており、本貝塚周辺にまで海岸線が入り込んでいたことが分かる事例である。また、同時期の貝塚として、大淀川を挟んだ対岸の丘陵上に柏田貝塚が所在する。

弥生時代の遺跡としては、城平遺跡の西方約 270m の丘陵上とその縁部に所在する石ノ迫第 2 遺跡がある。本遺跡は大きく弥生時代中期中葉を主体とする環濠集落と、後期後葉から終末期の集落、古墳時代前期の周溝状遺構、土坑墓群からなる。また、城平遺跡の南側に位置する微高地には、弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉の堅穴住居や土坑が確認された間越遺跡が所在する。

微高地の西側に隣接する丘陵上とその周辺には、国指定史跡「生目古墳群」が所在する。生目古墳群は、九州で唯一、3 世紀後半～4 世紀後半の古墳時代前期に 100m を越える規模の前方後円墳が 3 基築造された古墳群である。また、汎日本列島のな前方後円墳と、南九州の在地墓制である地下式横穴墓が墓域内で共存、融合する、高塚古墳の地域的展開を考える上でも重要な古墳群といえる。なお、生目古墳群の前方後円墳は、5 世紀後半の 7 号墳で築造を終えている。

古墳時代の集落跡については、前述の間越遺跡で古墳時代中期～後期の堅穴建物が多数検出されている他、城平遺跡が所在する微高地では、大屋敷遺跡で 5 世紀後半の堅穴建物 1 軒が検出されている。また、間越遺跡では 6 世紀前半の地下式横穴墓が 2 基確認されている。

古代以降の遺跡では、前述の大屋敷遺跡で 7 世紀～9 世紀の遺構、遺物が検出されている。また、県道宮崎西環状線建設に伴い発掘調査が実施された跡江坂ノ下遺跡では、近世の土壇墓が検出されている他、中世の遺物も出土している。



第1図 周辺遺跡 (S=1/10000)

第Ⅱ章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

平成24年10月31日、跡江保育所整備事業に伴い本市福祉部子ども課より大字跡江2007番地における埋蔵文化財の有無について、本市教育委員会文化財課宛てに照会がなされた。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地「生目古墳群」と「堂原遺跡」に近接することから、平成25年3月21日、事前の試掘調査を実施した。試掘調査の結果、事業地内には黄褐色粘土層上面で遺構、遺物が残存していることが明らかとなった。また、平成25年6月5日には既存建物北側部分について、追加の確認調査を実施した。これらの結果を受けて、文化財課と子ども課との間で埋蔵文化財の取り扱いに関する協議を重ねた結果、工事による削平を免れない園舎建築部分(A区)と外構工事による削平部分(B区)の計770㎡について、記録保存を目的とした本発掘調査(第1次)を実施するに至った。

また、平成26年度実施の外構工事に伴い、新たに削平範囲が生じることが判明し、その範囲内の污水管設置工事に伴う工事立会いを平成26年8月19日に実施した。この工事立会いの結果、黄褐色粘土層上面で遺物包含層と遺構が残存していることが明らかとなった。この結果を受けて、削平が生じる75㎡についても、埋蔵文化財の現状保存が困難なことから記録保存を目的とした本発掘調査(第2次)を実施するに至った。

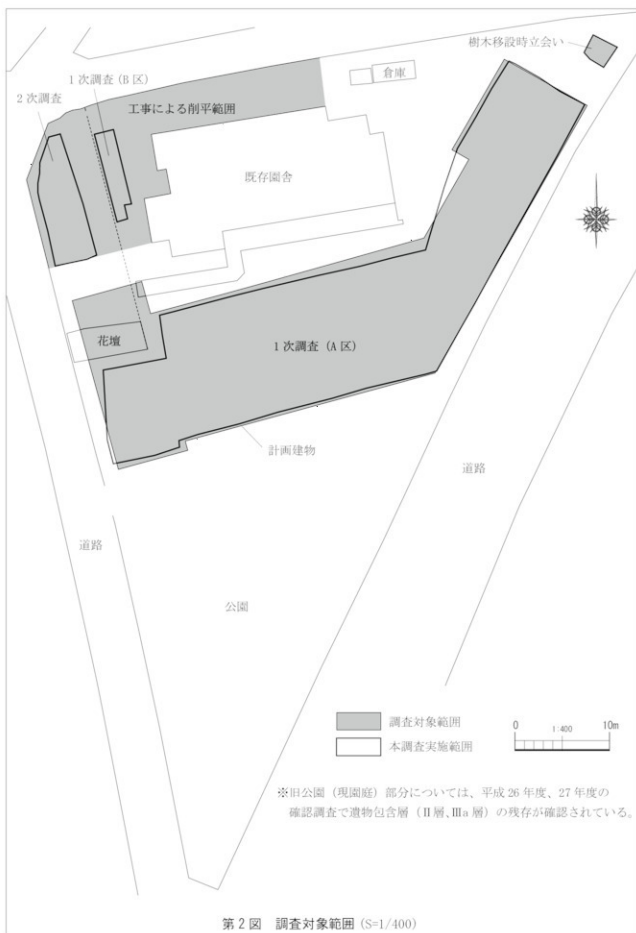
第2節 調査の経過

第1次調査は平成25年8月19日～平成25年12月13日に実施した。調査はまずA区から着手し、重機により表土を除去し、地山粘土層(Ⅲb～Ⅸ層)上面で遺構検出を試み、その後人力による遺構掘削を記録作業と併行して行なった。また、遺構掘削と併行して縄文時代後期～古墳時代前期の遺物包含層(Ⅱ～Ⅲa層)の掘削を実施した。

B区については、既存配管等を考慮して既存園舎の西側部分のみを調査範囲とした。A区の調査と併行して人力により表土剥ぎと遺物包含層(Ⅲa層)の掘削を行なった。その後、灰褐色粘土層(Ⅲb層)上面で遺構検出を試み、その後人力による遺構掘削を記録作業と併行して行なった。B区は空中写真撮影後、人力により埋め戻しを実施し原状復旧を行なった。空中写真撮影は平成26年3月12日に実施し、その後調査機材の撤収作業を行ない、調査を終了した。本発掘調査の総面積は679.8㎡となった。発掘調査の延べ日数は68日である。

第2次調査は平成26年12月1日～平成26年12月10日に実施した。調査はまず重機により表土を除去し、遺物包含層(Ⅱ層)を露出させ、その後人力による遺構検出と包含層掘削を記録作業と併行して行なった。その後、調査機材の撤収作業を行ない、調査を終了した。本発掘調査の総面積は50㎡となった。発掘調査の延べ日数は7日である。

整理作業は宮崎市清武埋蔵文化財センターで行ない、水洗い、注記、接合作業を平成26年9月16日～平成27年1月22日に、実測、トレース作業を平成27年9月24日～平成28年2月3日の期間で実施した。また、平成28年度に調査員による遺物写真撮影と編集作業を実施した。



第2図 調査対象範囲 (S=1/400)

第III章 1次調査の成果

第1節 調査成果の概要

1次調査は、計画建物部分（A区）と工事による削平部分（B区）の2箇所を調査対象とした。表土剥ぎの結果、A区東側は過去に削平を受けており、柱穴が数基検出されたのみであったが、中央部～西側にかけて古墳時代の竪穴建物5棟、掘立柱建物1棟、溝状遺構3条、柱穴が多数検出された。また、西側では表土下に遺物包含層であるⅡ層、Ⅲa層が残存しており、層中から縄文時代後期～古墳時代の土器、須恵器の出土がみられた。

第2節 基本層序

城平遺跡の基本層序は第3図の通りである。約0.2mの表土（Ⅰ層）下に高原スコリアと思われる軽石粒を多く含む黒褐色粘土（Ⅱ層）が堆積し、その下位に軽石粒を少量含む暗褐色粘土（Ⅲa層）が堆積する。遺構の多くは灰褐色粘土（Ⅲb層）上面で検出された。それより下位の層序は、黒褐色あるいは暗褐色粘土と褐色粘土の互層となっている。

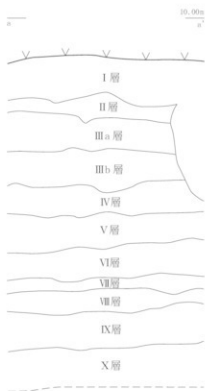
表土下の堆積状況を見ると、Ⅱ層及びⅢa層は調査区の西側のみ堆積しており、東側では明黄褐色のざらざらした質感の粘土層が表土下に検出される状況であった。このことから、東西方向に土層確認トレンチを設定し土層の対応関係を確認したところ、第6図のような削平状況が確認された。調査地の原地形は、概ね東側から西側に向かって傾斜する緩斜面地であり、西側はⅨ層まで大きく削平を受けているとみられる。

第3節 古墳時代の遺構と遺物（A区）

A区は計画建物部分に該当する。調査区西側の現況花壇部分は、解体等の工事スケジュールの関係上、記録保存調査範囲から除外し工事の際に立会いを実施した。以下、検出された遺構毎に報告する。

竪穴建物2（第5図） 調査区西側で検出された。検出面はⅣ層上面である。北側隅が調査区外に及んでいるが、平面形は3.7m×3.1mのややいびつな方形を呈し、検出面から貼床面までの深さは0.2mを測る。地山ブロックを含む粘土で貼床を形成している。貼床面を精査したが柱穴は確認できなかった。貼床面直上で焼土と炭化材が多量に検出された。焼土は概ね炭化材の上に被さっており、特に西側壁面に沿ってまとまった堆積が認められる。炭化材は丸太材と板状材がある。建物西側では、丸太材が建物の東西辺に沿うように出土しているが、東側ではそのような傾向は認められない。建物東側隅に板材と丸太材のまとまった出土が認められるが、農具のような製品類は確認できなかった。また、建物西隅でやや厚手の板材が内側に倒れこむような形で出土している。

貼床面直上では、建物南側で壁面沿いに地山ブロックを含む粘土層の堆積が認められる。この層は炭化材や焼土を多く含む4層よりも先に堆積していることが確認できる。貼床面では、建物中央部やや東寄りに平面不整形の浅い土坑が造られており、焼土や細かな炭化物を含むことから地床炉と判断した。なお、貼床面直上から出土した炭化物のAMS測定値はAD50-140(2



基本層序

- I層 しぶい黄褐 (10YR4/3)。粘性なし、しまり強い。シルト。表土。
- II層 黒褐 (10YR2/2)。粘性弱い、しまりやや強い。粘土。0.1cmの軽石粒 (高原スコリアカ) を多く含む。
- IIIa層 黒褐 (7.5YR3/2)。粘性あり、しまり強い。粘土。0.1cmの軽石粒 (高原スコリアカ) を少量含む。
- IIIb層 灰褐 (7.5YR4/2)。粘性あり、しまり強い。粘土。
- IV層 しぶい黄褐 (10YR5/3)。粘性あり、しまり強い。粘土。
- V層 黒褐 (10YR3/2)。粘性あり、しまり強い。粘土。
- VI層 しぶい黄褐 (10YR5/4)。粘性あり、しまり強い。粘土。
- VII層 褐 (10YR4/4)。粘性弱い、しまり強い。粘土。ややざらざらした質感。
- VIII層 暗褐 (10YR3/3)。粘性弱い、しまりやや強い。粘土。
- IX層 明黄褐 (2.5Y7/6)。粘性弱い、しまり強い。シルト。ガラス質の粒子を多く含む、ざらざらした質感。
- X層 黒褐 (10YR2/2)。粘性あり、しまりやや強い。粘土。

第3図 調査区削平状況 (S=1/400)、基本層序 (S=1/20)

σ)である(第V章)。

遺物は床面直上で炭化材とほぼ同レベルで少量の土師器が出土している。1と2は小型の壺である。3は高坏の坏部片である。口縁部に暗文状ミガキが確認できる。4は手づくねの鉢である。また、建物東側壁面付近で不明鉄片が出土している(小破片により未図化)。

竪穴建物3(第6図) 調査区中央部で竪穴建物4と並んで検出された。検出面はⅧ層及びⅨ層上面である。平面形は6.3m×6.3mの隅丸方形で、北側の中央部分が張出す形態を呈し、検出面から掘り方面までは0.35mを測る。地山ブロックを含む粘土で貼床を形成している。中央部を既存の水道管が通っており、その部分を掘り残しての調査となった。また、東側は削平を受けている関係で、貼床面直上までの土層が消失している。掘り方面で3基の土坑と15基の小穴を検出したが、全てが建物に伴うものかどうかは不明である。やや中央部寄りの8基の小穴群は建物の平面形に対応する形で方形に並ぶことから、これらの中に建物の柱穴を含んでいるとみられる。建物の北、南、東隅でも小穴が検出されているが、西側隅には確認できなかったことから柱穴かどうかは断言できない。埋土中から土師器の出土がみられた他、貼床面直上で焼土、炭化材と遺物の出土が確認された。特に中央部の土坑付近で甕(13)と凹石(28)がまとまって出土した。また、中央部分の焼土下から鉄製刀子が出土した。なお、貼床面直上から出土した炭化材のAMS測定値はAD80-240(2σ)である(第V章)。

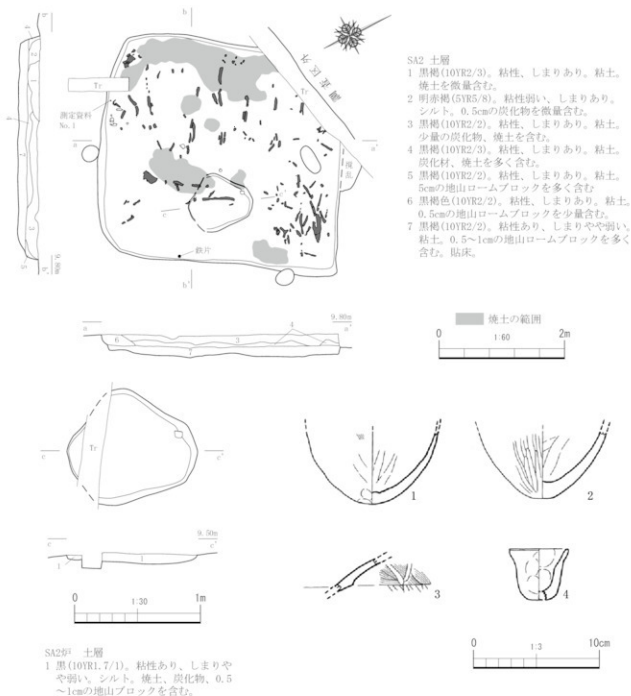
遺物は埋土中から出土したもの(5-12)と貼床面直上で出土したもの(13-28)を図化した。5は縄文時代晩期の孔列土器である。口縁部下位に突帯を貼り付け、指による押厚で刻みを施している。6は縄文後期の深鉢である。7は円形浮文を有する壺の胴部である。12は軽石加工品である。表面を面取りしているが、使用痕等は認められない。

13は球胴の甕である。底部はレンズ上の平底を呈し、強く熱を受けて全体が赤く変色している。14~17は甕である。18と19は二重口縁壺の口縁部である。口縁部外面に櫛描波状文が施されている。23と24は高坏の坏部である。23は器表面が剥落しており調整などは不明であるが、口縁部が外傾し緩やかに外反する形態を呈する。24の坏部接合は付加法である。25は器台と思われる口縁部片である。内外面に縦方向のミガキを施している。27は砂岩製の敲石である。上下の端部と側面に敲打痕が認められる。28は砂岩製凹石である。自然面に2箇所凹みが形成されており、一部に研磨の痕跡が認められる。29は鉄製ヤリガンナである。30は鉄製刀子である。わずかに木質が付着しているが、刀子本体に伴うものかは不明である。

竪穴建物4(第9図) 調査区中央部で竪穴建物3と並んで検出された。検出面はV層及びVI層上面である。西側で溝状遺構5と重複しているが、埋土が近似しているため前後関係が判断できなかった。平面形は4.4m×4.1mの隅丸方形を呈する。地山ブロックを含む粘土で貼床を形成している。検出面から貼床面までの深さは残りの良い箇所では0.1mだが、土地の削平及び攪乱等で遺構上部が消失しており、部分的に貼床面まで削平が及んでいる。貼床面を精査したが柱穴は確認できなかった。建物東隅で土坑が1基検出され、埋土中から床面にかけて遺物が多量出土した。また、土層ベルトを観察したところ、建物の構築以前に造られた不整形の土坑が確認された。しかし、この土坑からは遺物が出土していないため、構築時期は不明である。

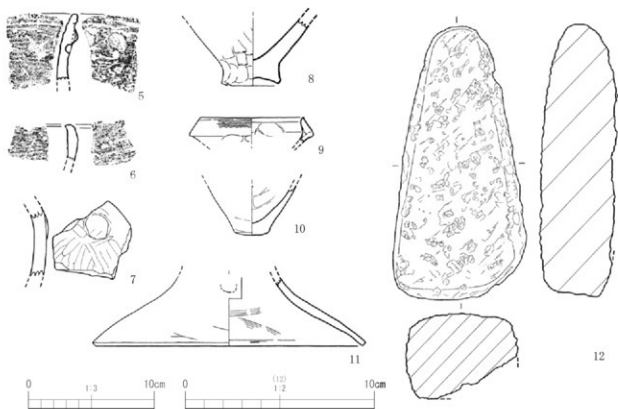
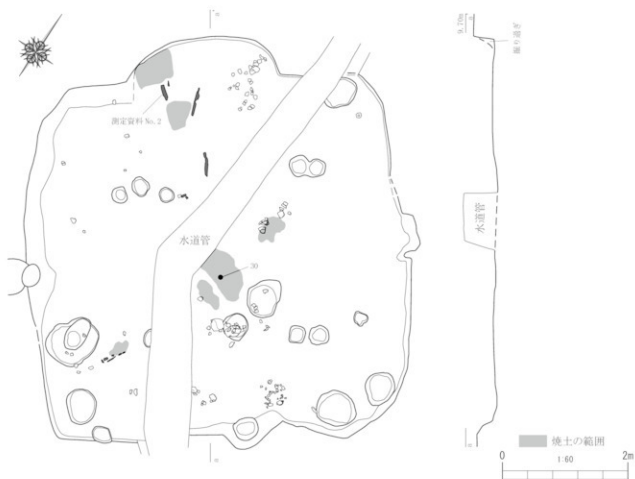


第4図 遺構配置図 (S=1/300)

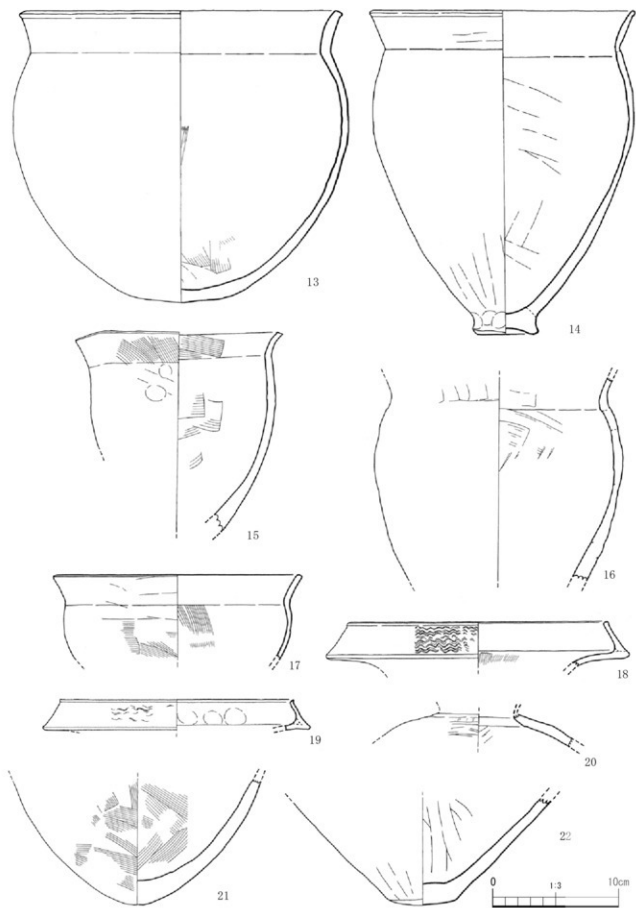


第5図 竪穴建物2実測図 (S=1/60)、炉実測図 (S=1/30)、出土遺物実測図 (S=1/3)

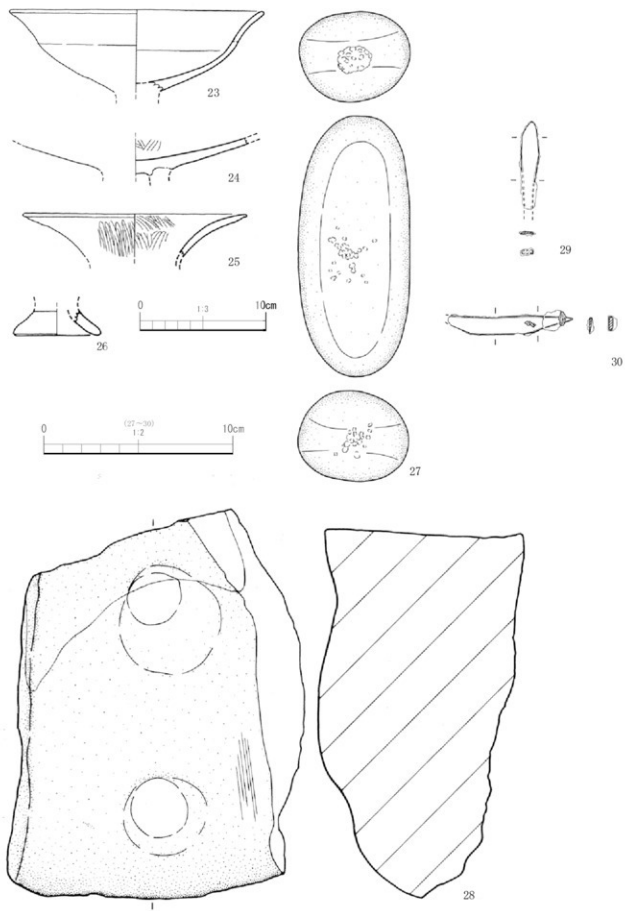
遺物は貼床面直上と建物内土坑中から出土した(第10図)。31は縄文時代後期丸尾式の深鉢である。32は小型甕の底部である。33は建物内土坑から出土した小型の壺である。肩部に縦位の櫛描波状文が2単位施されている。34は脚台付鉢と思われる。外面にミガキを施し、脚台内面に粘土接合痕が観察できる。35は円形の透かし坑を有する布留式系小型器台の脚部である。胎土が精良で、器壁が薄く作られている。外面に縦方向のミガキを施し、内面には横位のハケ目を施している。36はチャート製剥片である。折れているが本来は横長の剥片とみられる。37は砂岩製砥石である。端部に敲打痕が認められることから、敲石として転用されたとみられる。



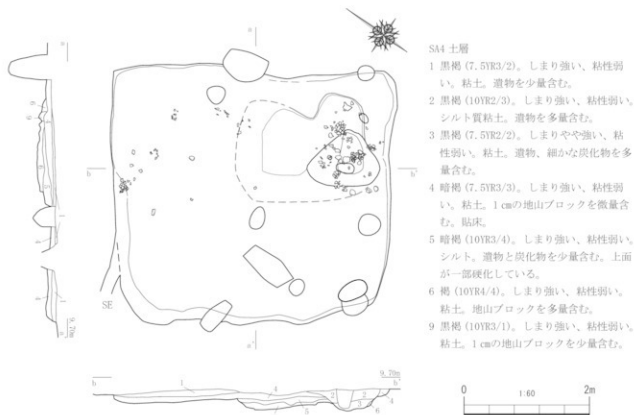
第6図 竅穴建物3実測図(S=1/60)、出土遺物実測図①(S=1/3・1/2)



第7図 竪穴建物3出土遺物実測図② (S=1/3)



第8图 竖穴建物3出土遺物実測图③ (S=1/3·1/2)



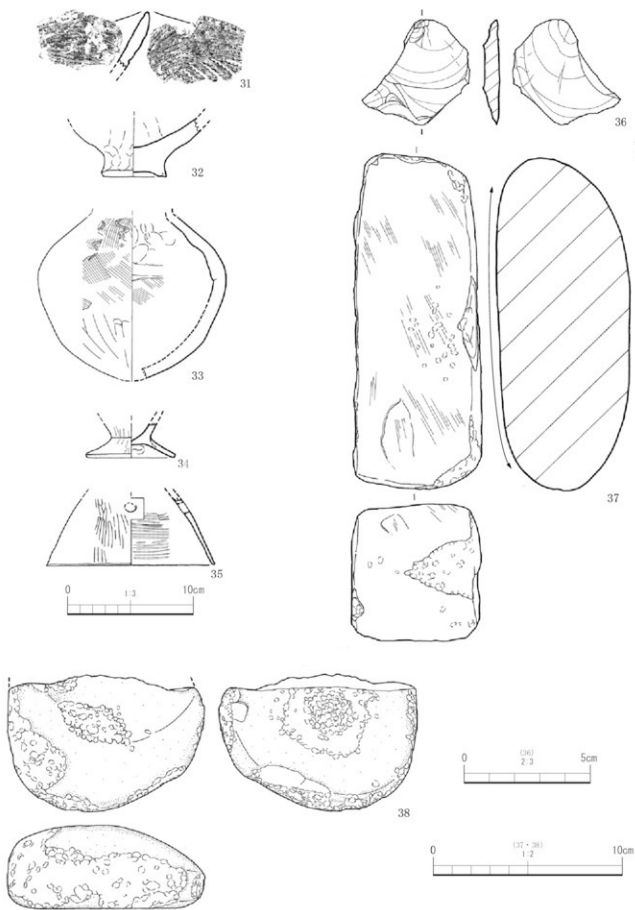
第9図 竪穴建物4実測図 (S=1/60)

38は砂岩製敲石である。

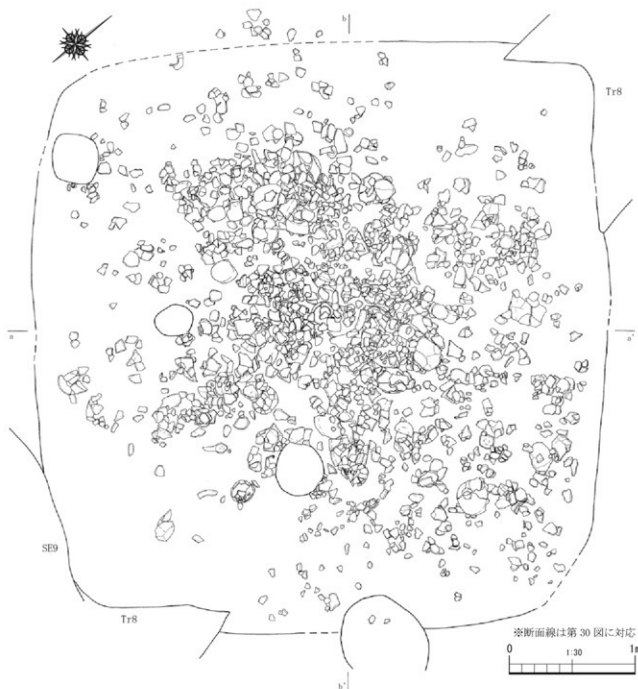
竪穴建物6(第11図、第30図) 調査区西側で竪穴建物7と並んで検出された。遺物包含層であるII層とIII a層を掘削する途中で遺物の集中がみられたため、サブレンチを設定しIV層上面まで掘下げたところ、方形のプランを検出した。土層の観察から、建物の掘り込みはIII a層の中頃から掘り込まれていることが確認できる。平面形は4.5m×4.4mの隅丸方形を呈し、検出面から貼床面までの深さは0.4mを測る。地山ブロックを含む粘土で貼床を形成している。

建物埋土上層に多量の遺物が廃棄された土器溜まりが検出された(第11図)。建物の埋土を観察すると、貼床面直上に炭化材や焼土を含む黒褐色粘土層が堆積し、その上位に地山ブロックを多く含む粘土層が建物壁面に沿って堆積している。そしてその上位に遺物を多量に含む黒褐色粘土層の堆積が認められることから、建物廃棄後の窪地を利用して土器を廃棄したものと考えられる。遺物の堆積状況を観察した限りでは、遺物の廃棄に明確な単位や時期差を見出すことはできなかった。この土器溜まり中の土器には甕、壺、高坏、鉢、土製品といった各器種が含まれており、甕や壺には煤が付着したものも多い。また、石包丁、敲石、砥石といった石器や、軽石加工品、三角形鉄片の出土もみられた。なお、土器溜まり埋土中から出土した炭化物のAMS測定値はAD120-240(2σ)である(第V章)。

遺物は多量出土しており、完形に復元できるものも多い。39は大型甕である。砲弾形の胴部で、口縁部は緩やかに外反する。胴部及び口縁部外面はハケメ調整され、口縁部はいわゆるカ

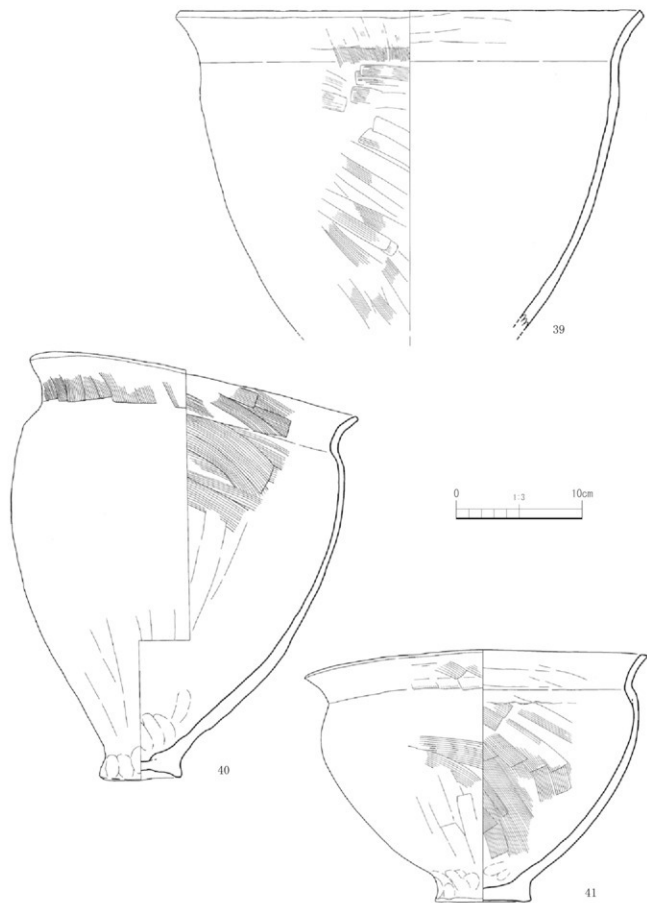


第10图 竖穴建物4出土遺物実測図(S=1/3・2/3・1/2)

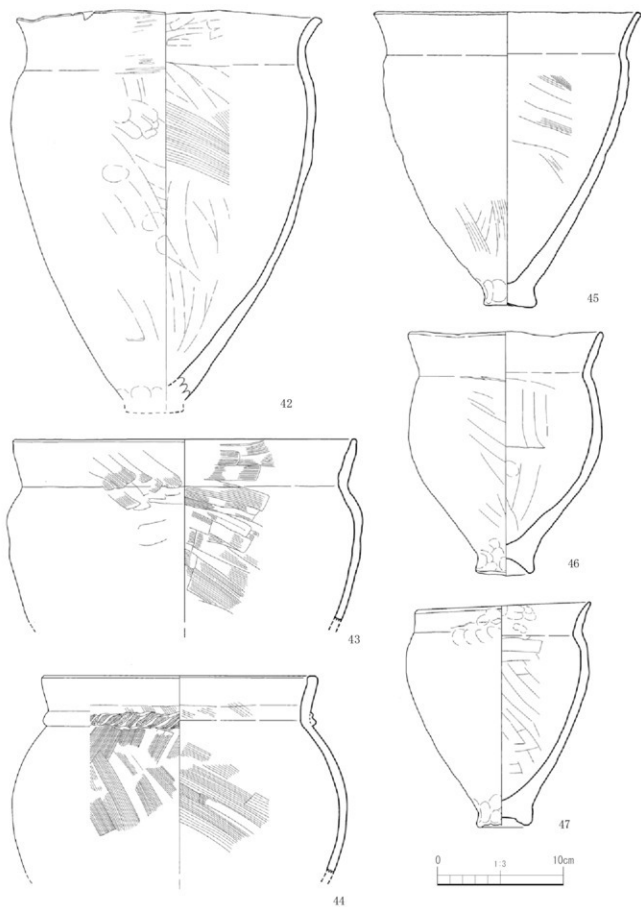


第11図 竪穴建物6上層土器溜まり実測図 (S=1/30)

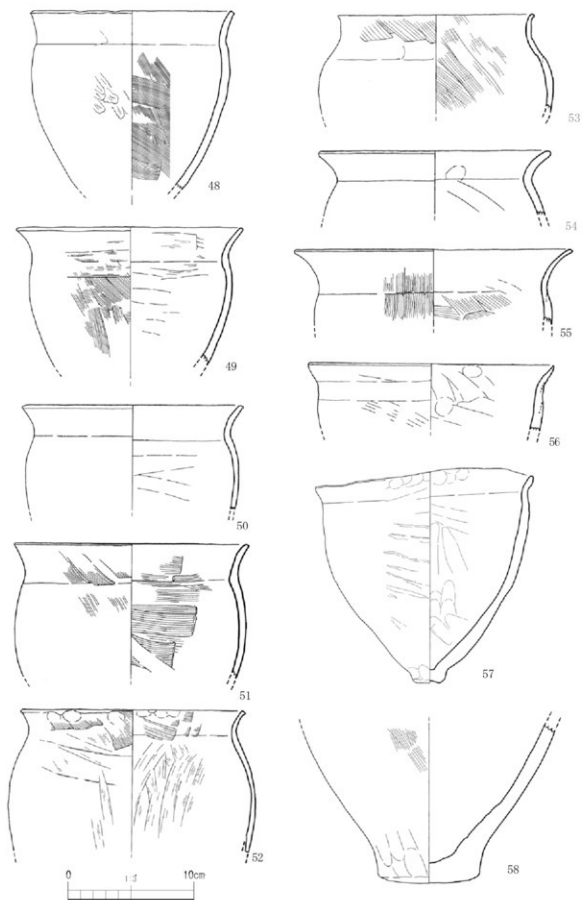
キアゲ状の調整が施されている。41は器高の低い中型甕である。底部は粘土紐付加によると思われる安定した平底を呈し、口縁部の付け根は明瞭に屈曲する。内面に粘土紐接合痕が観察できる。40、42～80は中型甕、小型甕である。底部は粘土紐付加あるいはつまみ出しで上げ底あるいは平底に成形するものと、ユビナデにより平底あるいはレンズ状平底を形成するもの(58、61、62、64、65、66、80)の二者がある。胴部は砲弾形で頸部がしまりをもつが、口縁部付け根の後縁は緩やかなものが多く、中にはなだらかなカーブを呈するものもある。口縁部は斜め上方に立ち上がり、口唇部は平坦面を持つものと丸みを帯びるもの二者がある。外面の調整は、胴部下半が縦方向、胴部上位は斜め方向のハケメ、ナデ調整(ケズリ調)を主体とし、口縁部



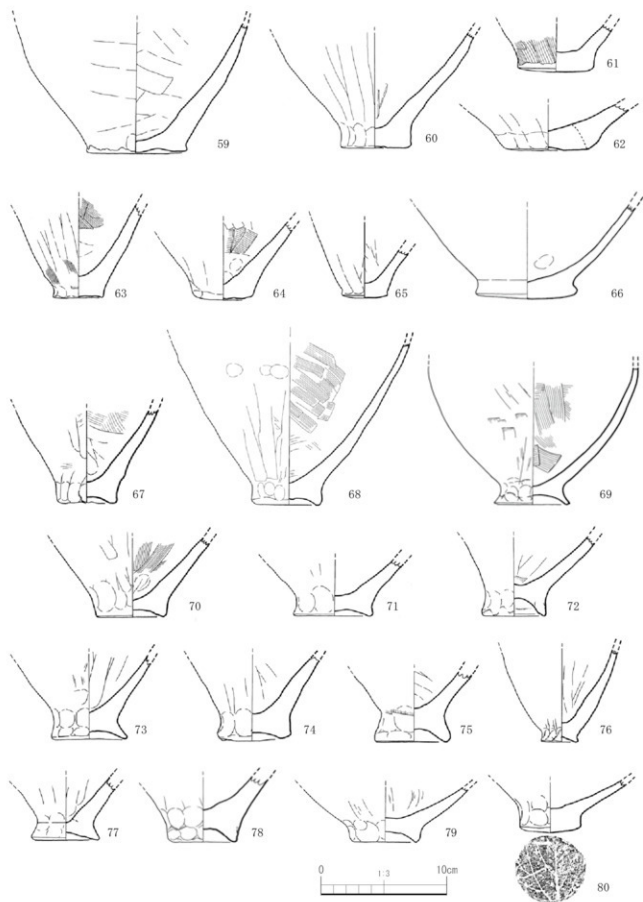
第 12 図 竖穴建物 6 上層土器溜まり出土遺物実測図① (S=1/3)



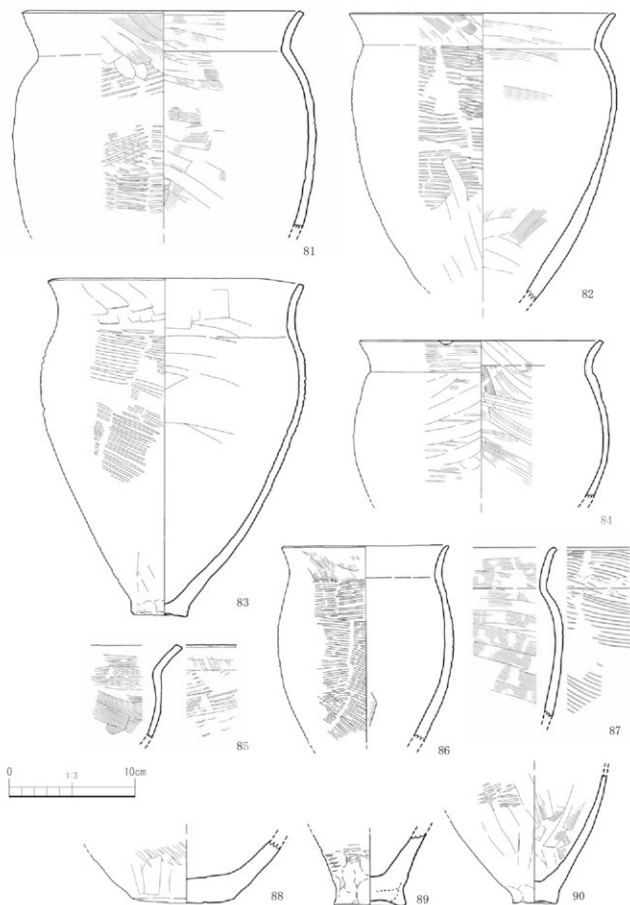
第13図 竪穴建物6上層土器溜まり出土遺物実測図② (S=1/3)



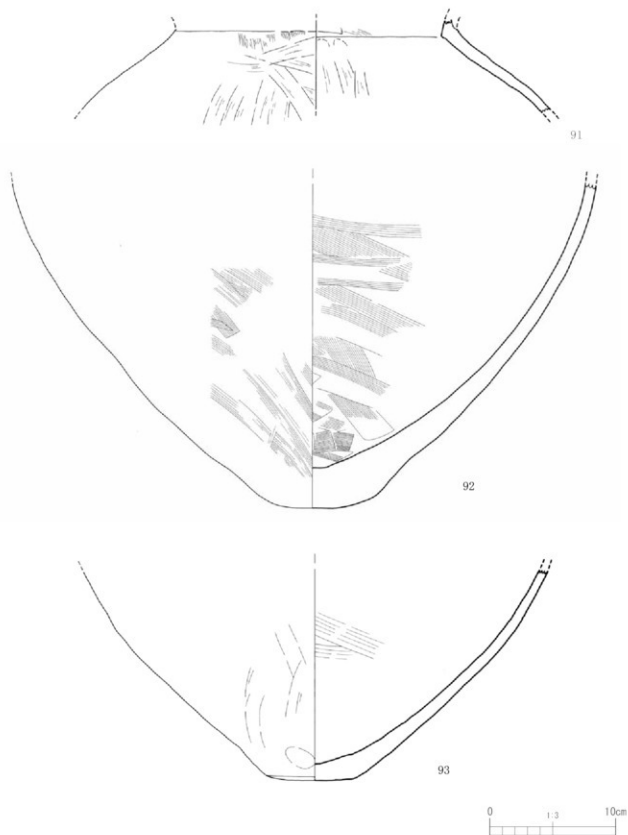
第 14 図 竖穴建物 6 上層土器溜まり出土遺物実測図③ (S=1/3)



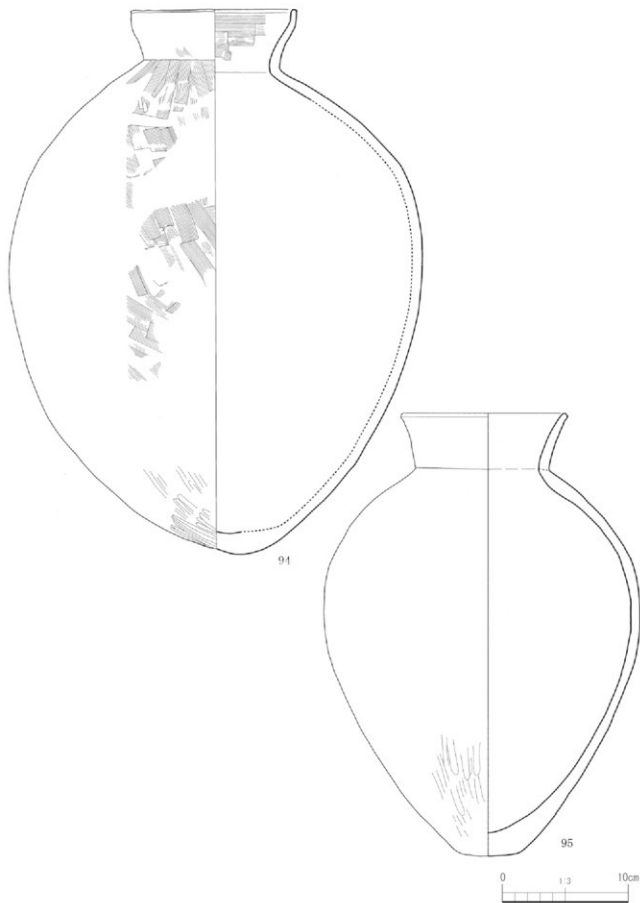
第15図 竪穴建物6上層土器溜まり出土遺物実測図④ (S=1/3)



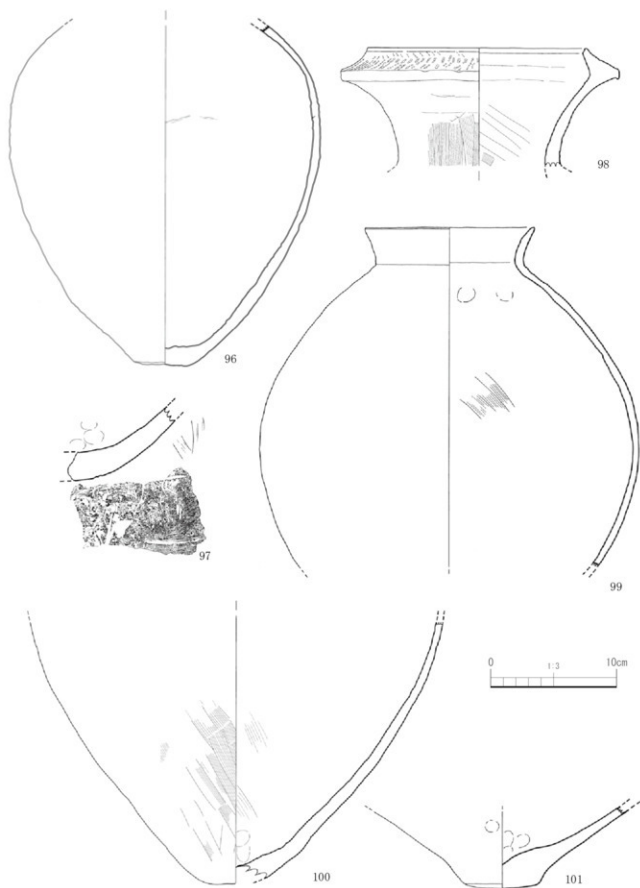
第 16 図 竪穴建物 6 上層土器溜まり出土遺物実測図⑤ (S=1/3)



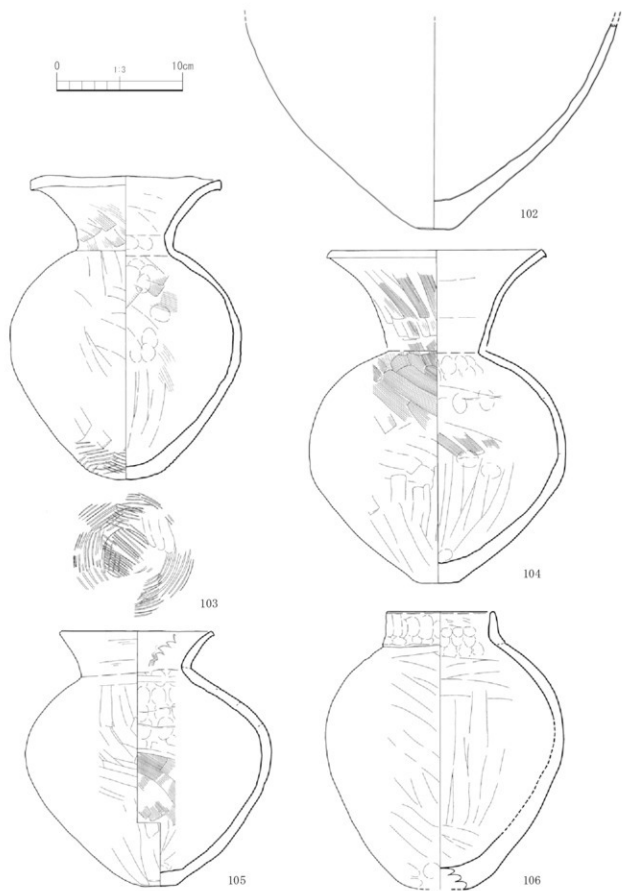
第17図 竪穴建物6上層土器溜まり出土遺物実測図⑥ (S=1/3)



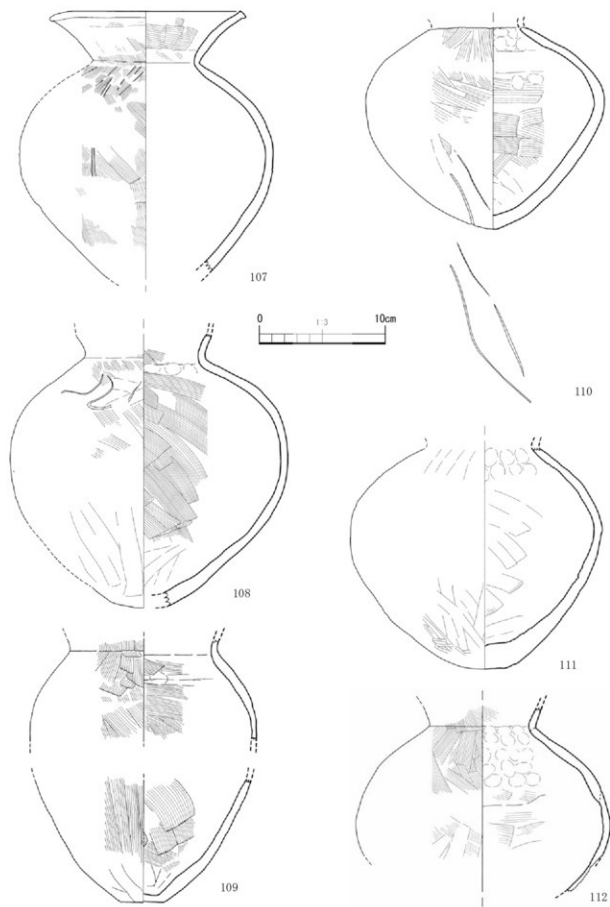
第18図 竪穴建物6上層土器溜まり出土遺物実測図⑦(S=1/3)



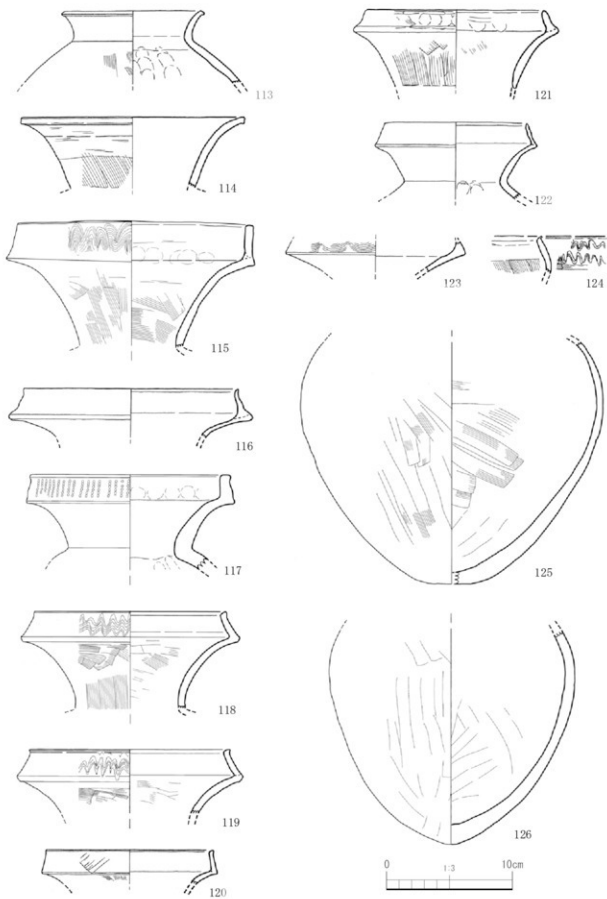
第19図 竖穴建物6上層土器溜まり出土遺物実測図⑧ (S=1/3)



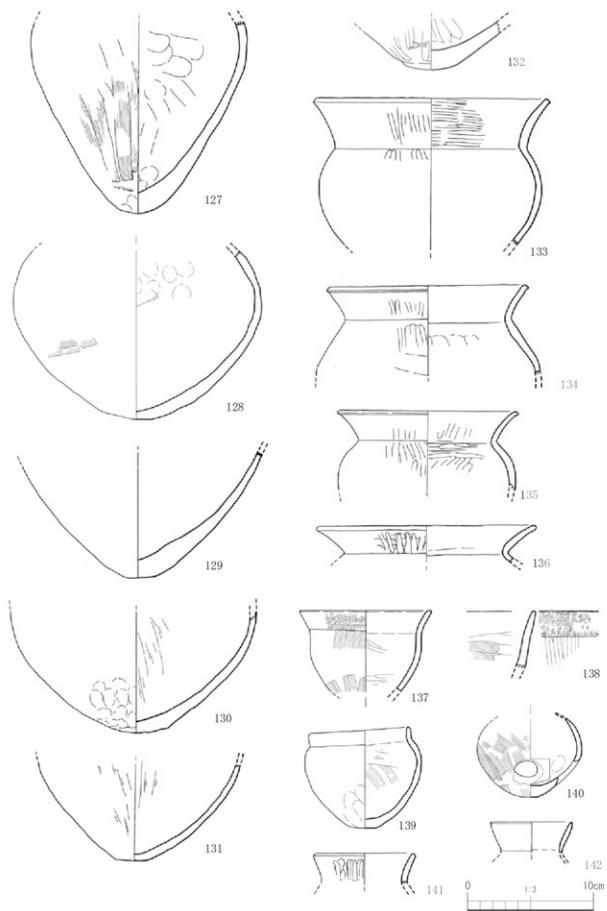
第20図 竪穴建物6上層土器溜まり出土遺物実測図⑨ (S=1/3)



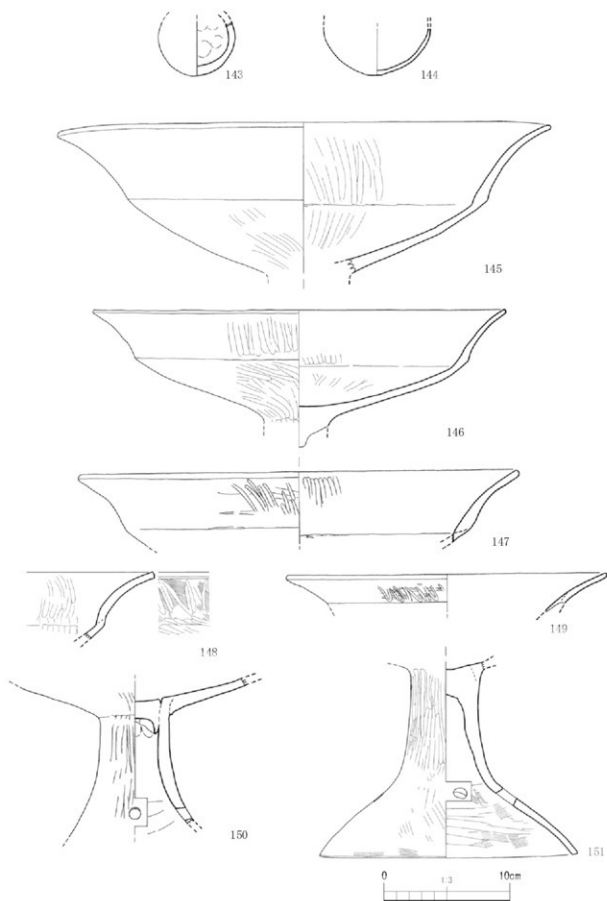
第21図 竪穴建物6上層土器溜まり出土遺物実測図⑩ (S=1/3)



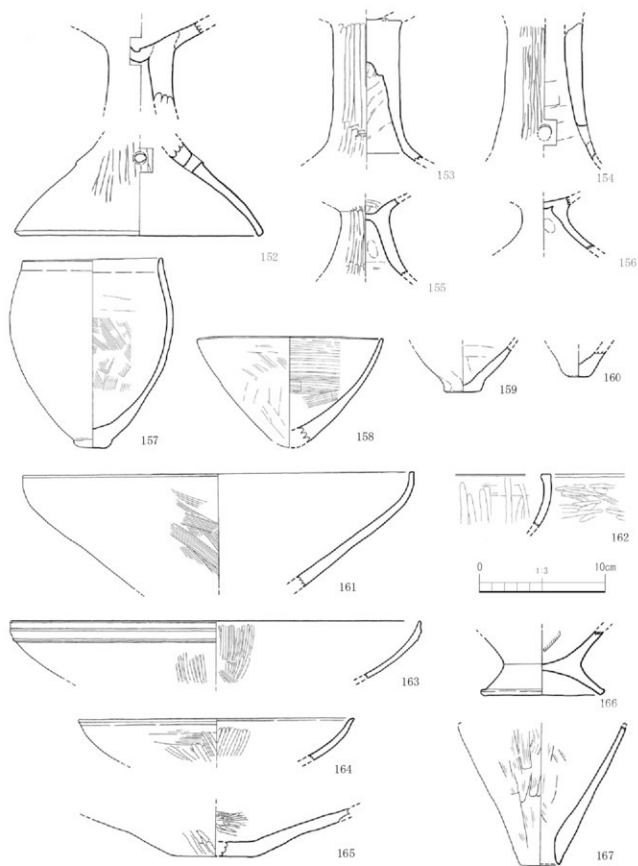
第 22 図 竖穴建物 6 上層土器溜まり出土遺物実測図① (S=1/3)



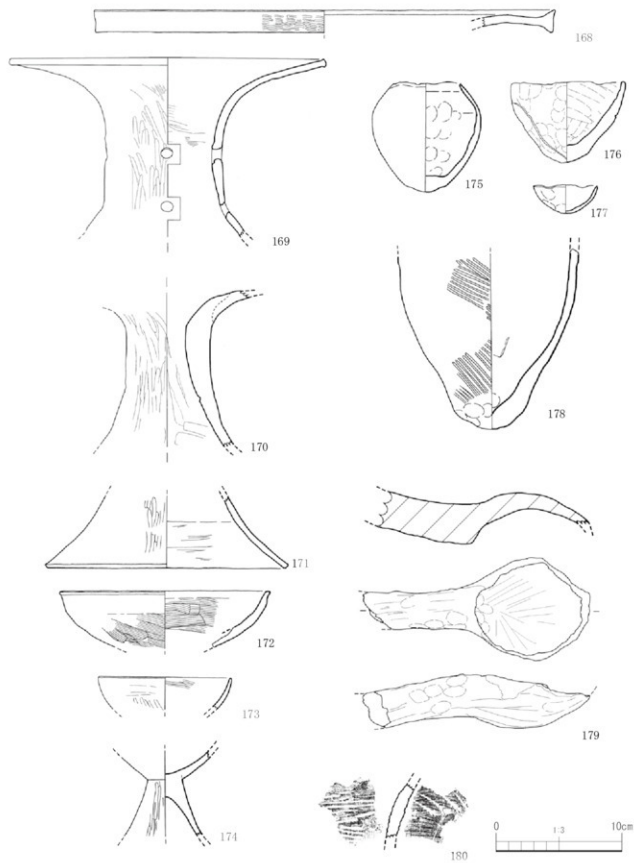
第23図 竪穴建物6上層土器溜まり出土遺物実測図⑫ (S=1/3)



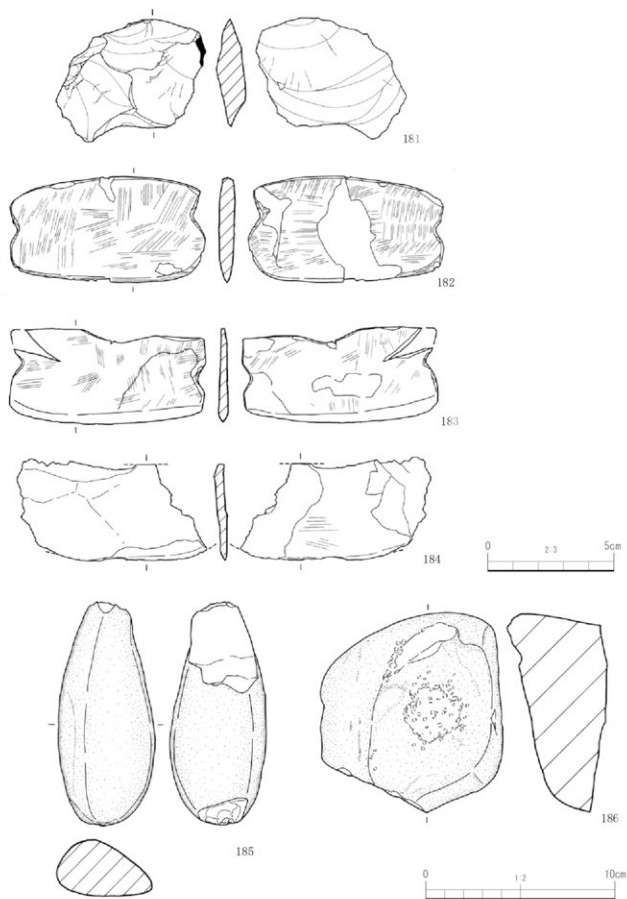
第24図 竪穴建物6上層土器溜まり出土遺物実測図⑬(S=1/3)



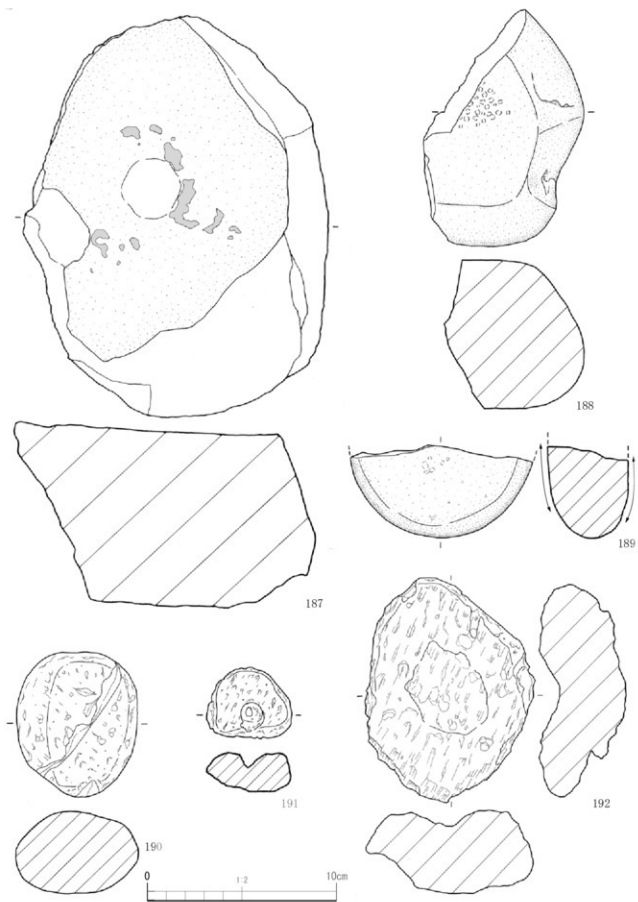
第 25 図 竪穴建物 6 上層土器溜まり出土遺物実測図⑭ (S=1/3)



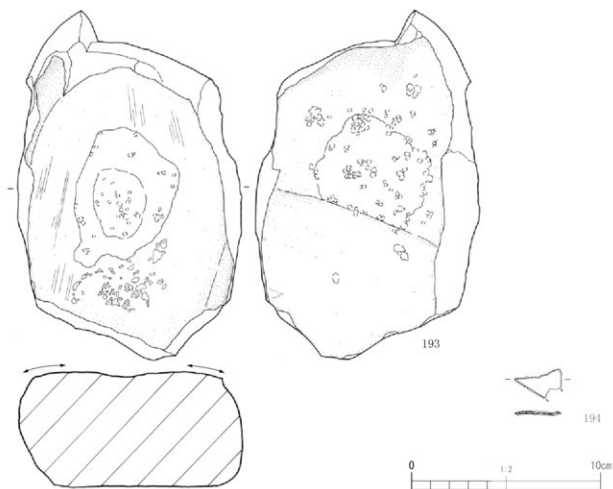
第 26 図 竪穴建物 6 上層土器溜まり出土遺物実測図⑮ (S=1/3)



第27図 堅穴建物6上層土器溜まり出土遺物実測図⑩ (S=2/3・1/2)



第28図 竪穴建物6上層土器溜まり出土遺物実測図① (S=1/2)



第29図 竈穴建物6上層土器溜まり出土遺物実測図⑩ (S=1/2)

はカキアゲ状ハケメ後ヨコナデを施すことを基調としている。内面は胴部が縦あるいは斜め方向のハケメ、ナデ調整で、口縁部は横位のハケメ後ヨコナデを基調とする。ただし、外面の胴部と口縁部を連続した縦方向のハケメで調整するもの(55)や、頸部に強いヨコナデを施して口縁部を屈曲させるもの(56)など、調整にはバリエーションがある。

また、53は胴部が強く張り口縁部が直立する、別系統の中型甕である。内面のハケメがややケズリ調であり、場所によっては器壁を薄くする効果を得ている。44は球形状の胴部に直立する口縁部を有する外来系と思われる中型甕である。頸部に刻目突帯を施し口縁部内面にわずかな段を有する。突帯の刻目にはハケメ工具をそのまま用いている。また、80の外底面には木葉痕が認められる。突出する底部に木の葉を包み込むように押し付けた痕跡が確認できる。

81～90はタタキを有する中型、小型甕である。全体のプロポーシオンは在地系中型、小型甕と共通する。81と82は口縁部の屈曲が明瞭であり、胴部に横方向あるいは図上右上がりのタタキを施し、口縁部は図上左上がりのカキアゲ状ハケメを施している。83～87は口縁部の屈曲が緩やかな一群である。胴部にタタキを施すが、ナデ消しているもの(84)もみられる。タタキの方向は横位と図上左上がりのものが多いが、85は図上右上がりである。口縁部は図上

左上がりのカキアゲ状ハケメ (83、86)、ヨコナデ (85)、あるいはタタキ (84、87) 調整が施される。内面はハケメあるいはナデ調整である。88～90は底部片である。88はレンズ状平底を呈し、外面の調整はタタキ後に縦方向のケズリ調ナデを施している。89は粘土紐付加により上げ底に成形する底部で、外面はタタキ後にユビオサエが施されている。90はつまみ出しにより平底に成形する底部で、タタキ後に左斜め上方向の工具ナデが施されている。内面はハケメ調整である。

壺は多数出土しているが、便宜上最大径が25cm以上のものを大型壺、25cm～10cmを中型壺、10cm未満を小型壺として報告する。91～102は大型壺である。91～93は特に大型の一群で、92は復元最大径が45cm以上を測る。底部はレンズ状平底であり、ハケメ、ナデにより調整が施される。94は完形の壺である。底部は丸底で、倒卵形の胴部を有し、頸部が外方に開きながら立ち上がり口縁部が内湾気味に屈曲する。調整は底面～胴部下半がミガキ、上半はハケメ調整である。95は完形の広口壺である。胴部下半に縦方向のミガキが認められるが、その他は摩滅により調整が不明瞭である。96は95と同様の広口壺であろうか。胴部内面に粘土紐接合痕が確認できる。97は壺底部破片である。外底面に靱、藁と思われる圧痕が認められる。98は壺の口縁部である。頸部がラッパ状に開き、口縁部は二重口縁を呈する。口縁部外面に櫛状工具による連続刺突文が施される。99は球形胴気味の広口壺である。101は大型壺の底部である。やや突出するレンズ状平底で、内底面にユビオサエ痕が多数認められる。

103～136は中型壺である。103-104は口縁部がラッパ状に大きく開く広口壺である。103は外底面～胴部下半にタタキ痕を有する。タタキ目は細筋であるが、器壁を薄くする効果は得られていない。105は偏球状の胴部に短く外反する口縁部を有する広口壺である。口縁部内面に櫛描鋸歯文が認められる。106は直口壺である。頸部に粘土紐接合の段差を明瞭に残し、口縁部をユビオサエにより成形している。107は偏球状の胴部に外反する口縁部を有する広口壺である。胴部外面に縦方向の線刻が認められるが、器表面が剥離しており、モチーフは判然としない。108も同様の広口壺だが、口縁部はわずかに内湾する可能性がある。肩部に波状の線刻が認められる。109は倒卵形の広口壺である。110～112は偏球状の胴部を有する壺である。110は外底面から胴部下半にかけて2条の線刻が認められる。111は底部付近の一部ミガキを施している。113～124は口縁部片である。113は広口壺の口縁部である。114はラッパ状に大きく開く広口壺である。図上左上がりのハケメ後にヨコナデ調整を施している。115は二重口縁壺である。頸部がラッパ状に大きく開き、口縁部は直立気味に立ち上がる。断面を観察すると、ラッパ状に開く頸部の上に粘土紐を接合し、さらに内側から補強の粘土を付加しているのが確認できる。口縁部外面に櫛描波状文が認められる。116は薄手の二重口縁壺である。117は厚手の二重口縁壺である。器壁が摩滅しているため不明瞭だが、口縁部外面に櫛状工具による連続刺突文が認められる。118と119は同一個体の二重口縁壺である。口縁部外面に櫛描波状文が認められる。121は調整がやや粗雑な二重口縁壺である。口縁部にユビオサエ痕を明瞭に残す。123はやや小型の二重口縁壺である。124は二重口縁壺の口縁部片である。外面に2条の櫛描波状文が認められる。125～132は中型壺胴部である。130は外面の底部付近に密なユビオサエの痕跡が認められる。132は胴部下半に「×」の沈線が確認できる。133～135は鉢形に近い形態の広口壺である。136は口縁部が強く屈曲する壺である。形態から近畿第V様式系の可

能性がある。

137～144は小型壺である。137と138は口縁部に微細な櫛描波状文を有するものである。137は橙色系の色調を呈し、やや他の小型壺と雰囲気異なる。なお、これらは脚台を有する鉢の可能性もある。139は口縁部が短く直立する小型壺である。140は球形胴の小型壺である。明黄橙色系の色調を呈し、胴部下半に内一外の穿孔が認められる。

145～156は高坏である。145～148は口径が30cmを越える大型高坏である。坏部内面及び外面にミガキを施すが、口縁部外面のミガキはやや粗く、部分的にハケメやナデ痕を残している。148と149は口縁部外面のミガキが鋸歯状に施され、暗文のような効果を得ている。150はスカート状の脚部を有する高坏である。脚部と坏部の接合は、筒状の脚柱部の側面に坏部の粘土を付加し、脚柱部を充填している。151と152は脚裾部がやや膨らむ形態の高坏である。152は坏部充填の際についたとみられる押圧痕が坏部内面に認められる。153は脚柱部上部が中実になる高坏である。155と156は小型の高坏である。155は坏部がやや深い形態を呈するが、隣接する石ノ迫第2遺跡6号竅穴状遺構出土の報告書No.109と同タイプのものであろう。

157～166は鉢である。157は突出する平底を有する深鉢である。158は丸底あるいは尖底の鉢である。内面に横位のハケメが明瞭に残されている。161と162は口縁部が直立する大型の鉢である。163は口縁部が肥厚する鉢である。粘土紐付加によるものかつまみ出しによるものは不明瞭だが、ヨコナデにより2条の突帯状の段を成形している。164は口縁部がわずかに外反する鉢である。166は脚台付鉢の脚台部である。167は底部に孔を有する鉢形の土器であり、便宜上有孔鉢とした。168～174は器台である。168は口縁部が上下に拡張する大型の器台である。口縁部外面に櫛描波状文が認められる。169は筒状の体部を有する器台である。受け部が大きく開き、柱部に上下2箇所穿孔が認められる。170は体部から裾部にかけて開くタイプの器台である。柱部内面にはシボリ痕を残す。172は小型器台の模倣品の可能性を考慮して、ここに掲載したものである。173と174は椀形の受部を有する小型の器台である。胎土は比較的精製されており、脚部外面と口縁部下にミガキ調整が認められる。

175は手づくねの小型無頸壺である。176～177は手づくね鉢である。176は胴部外面に線刻が認められる。

178は胴部にタタキ痕を有する鉢形の土器である。底部は内外面共にユビオサエ痕を明瞭に残し、全体的にいびつな形状を呈する。胴部外面に図左上がりのタタキ痕が認められる。胴部上半の形状が不明だが、長胴甕の可能性もある。

179は杓子状土製品である。把部は円柱状で、ユビオサエやナデにより調整される。

180は縄文時代後期丸尾式の深鉢である。

181は流紋岩製剥片である。182～184は挟入り石包丁である。182は頁岩製で、全面に磨痕が認められる。183と184はホルンフェルス製で、石材の特質上表面の磨痕は明瞭ではない。185は砂岩製敲石である。端部に敲打痕が認められ、使用時のものと思われる剥離が確認できる。186～188、193は砂岩製台石である。187と193は砥石としても使用されている。189は尾鈴山酸性岩製の磨石である。190～192は軽石加工品である。190は表面に沈線状の凹みを有する。191と192は中央に凹みを有するもので、191は凹みの周囲を面取りしている可能性がある。194は三角形鉄片とみられる鉄片である。



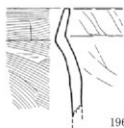
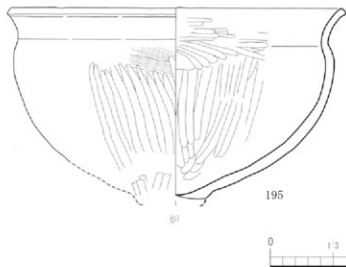
SA6 土層

- 1 黒褐 (Hue10YR2/2)。粘性、しまりあり。粘土。細かな炭化物を少量、土器を多量に含む。
- 2 暗褐 (Hue10YR3/3)。粘性、しまりあり。粘土。2cm~5cmの地山層ブロックを多く含む。
- 3 2と類似。
- 4 黒褐 (Hue10YR2/3)。粘性、しまりあり。粘土。炭化材。焼土を多量含む。0.5cm~1cmの地山層ブロックを多く含む。
- 5 4に類似するが、焼土を含まない。炭化物を特に多く含む。
- 6 黒褐 (Hue10YR2/3)。粘性、しまりあり。粘土。0.5cm~5cmの地山層ブロックを多く含む。粘床層。
- 7 暗褐 (Hue10YR3/3)。粘性、しまりあり。粘土。焼土と細かな炭化物を多く含む。
- 8 黒褐 (Hue10YR2/2)。粘性あり、しまりやや弱い。粘土。橙色粒子、炭化物を少量含む。
- 9 黒褐 (Hue10YR2/2)。粘性、しまりあり。粘土。0.5cm~3cmの地山層ブロックを含む。
- 10 黒褐 (Hue10YR2/3)。粘性、しまりあり。粘土。1cm~3cmの地山層ブロックを多く含む。



SA6 炉土層

- 1 黒 (Hue7.5YR2/1)。粘性弱い、しまりやや強い。粘土。1cmの炭化物を多く含む。
- 2 黒褐 (Hue10YR2/2)。粘性、しまりあり。粘土。炭化物、焼土を多く含む。
- 3 黒褐 (Hue10YR2/2)。粘性、しまりあり。粘土。焼土、炭化物、0.5~1cmの地山層ブロックを多く含む。

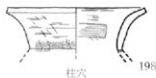


196



床面

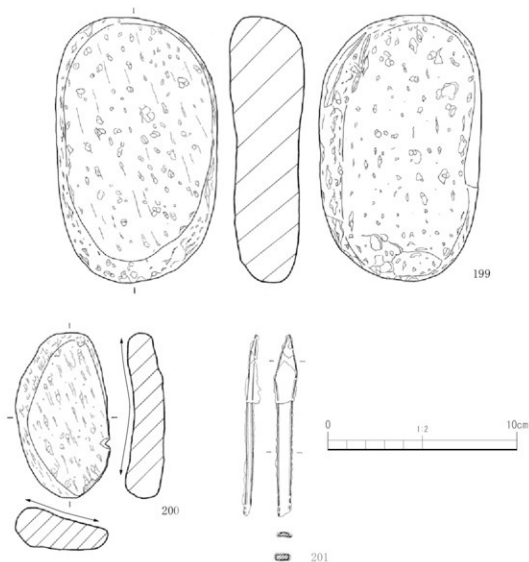
197



柱穴

198

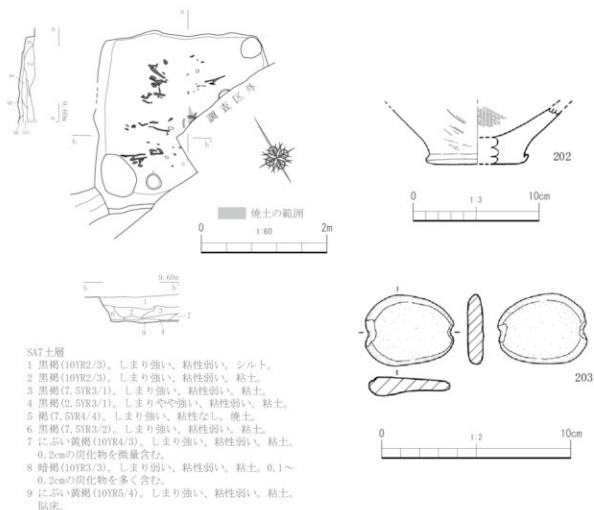
第30図 竪穴建物6実測図 (S=1/60)、炉実測図 (S=1/30)、出土遺物実測図① (S=1/3)



第31図 竪穴建物6出土遺物実測図② (S=1/2)

土器溜まりを除去すると、貼床面直上で多数の炭化材、焼土が検出された。炭化材は細い丸太材を主体とするが、東側の壁面沿いに径の太い角柱状の材が壁面に倒れ掛かるような状態で出土している。また、貼床面直上で土師器、鉄製品、石器等の遺物が少量出土した。貼床面では地床炉を1基検出した。炉の上からは土師器鉢(195)が置かれたような状態で出土したことから、建物廃棄の際に意図的に置かれた可能性がある。貼床面では柱穴を検出することができなかったが、掘り方面まで掘削した段階で、建物の四隅と中央主軸に沿って7基の小穴を検出した。建物中央の1基を除く6基は、建物との位置関係から柱穴と考えられる。

貼床面出土遺物は土器溜まり出土遺物と接合するものがあり(42、169、183)、上層から落ち込んだものも含んでいる可能性がある。床面直上遺物として確実なものは、地床炉直上で出土した鉢(195)と、炭化材の下位から出土した鉄製ヤリガンナ(201)である。195は底部が欠損しているが、突出する平底を呈するとみられ、丸みをもつ胴部から口縁部が外反する形態を呈する。内外面に共にミガキを施すが、外面の胴部上半はハケメ痕を残す。196は甕口縁部である。197は二重口縁壺である。198は広口壺である。外面の調整は、図上左上がりのハケメ



後にヨコナデを施している。199と200は軽石加工品である。200は表面に研磨による面取りが明瞭に認められる。201は鉄製ヤリガンナである。刃部の左側が磨り減っているようにみえる。

竪穴建物7(第32図) 調査区西側で、竪穴建物6と並んで検出された。試掘トレンチで確認されていた遺構である。検出面はIII b層であるが、竪穴建物6と同様に建物の掘り込みはIII a層の中頃から掘り込まれている。西側が溝状遺構9と重複し、建物の西側隅と東側隅に建物よりも新しい土坑が重複している。平面形は2.2m×2.3mの方形を呈し、南側が調査区外に及んでいる。地山ブロックを含む粘土で貼床を形成している。検出面から貼床面までの深さは深いところで0.2mである。貼床面直上で多くの炭化材を検出した。炭化材は細い丸太材を主体とし、建物の東西軸に沿った形で検出された。貼床面で小穴2基を検出したが、位置関係から柱穴かどうかは断定できない。また、建物中央部で焼土と炭化物を含む小穴を検出した。地床炉と考えられる。

遺物は埋土中と貼床面から少量が出土しているが、ここでは貼床面出土遺物のみを報告する。202は甕あるいは壺である。203は砂岩製の石錘である。扁平な長楕円形の石に2箇所の打ち欠きを施している。

第1表 竪穴建物一覧表

掲載頁	図番号	遺構番号	規模			主軸方向	火処	備考	年代
			長辺(m)	短辺(m)	床面積(m ²)				
p. 9	第5図	竪穴建物2	3.7	3.1	11.5	N-27° -E	地床炉	焼失	古墳前期か
p. 10	第6図	竪穴建物3	6.3	6.3	39.7	N-34° -W	—	張出し付き、焼失	古墳前期
p. 13	第9図	竪穴建物4	4.4	4.1	18.0	N-54° -E	—	屋内土坑	古墳前期
p. 36	第30図	竪穴建物6	4.5	4.4	19.8	N-39° -E	地床炉	焼失	古墳前期
p. 38	第32図	竪穴建物7	2.3	2.2	5.1	N-29° -E	地床炉	焼失	古墳前期

掘立柱建物10 (第33図) 調査区西側で、竪穴建物6と7に重複して検出された。遺構の重複関係は、竪穴建物6上層土器溜まりの上から柱穴が掘り込まれていることから、掘立柱建物の方が新しいと判断できる。3間×4間の掘立柱建物で、長軸6.75m、短軸4.6mを測る。建物の主軸は長軸がほぼ東西方向を向く。柱間隔は1～1.7mと差異があり、特に短軸の中央2本は1.2～1.3mと間隔が狭い。また、柱穴の大きさと深さは均一ではない。埋土はⅢa層に類似する黒褐色粘土であり、柱痕は確認されなかった。柱穴内からは少量の土師器片が出土したが、図化に耐え得るものはなかった。

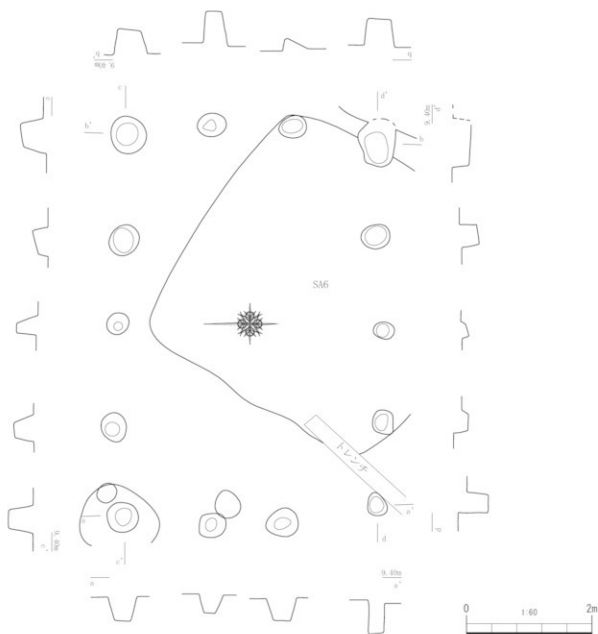
溝状遺構1 (第34図) 調査区中央部の南側で検出された。幅0.16m、深さ0.04mの断面すり鉢状を呈し、南側の延長は調査区外に及んでいる。北側は途切れているが、調査区東側が削平により土層が消失しているためかもしれない。埋土は暗褐色粘土であり、遺物は出土しなかった。

溝状遺構5 (第34図) 調査区中央部の南側で検出された。途中で途切れているが、規模と方向から同一の溝と考えられる。東側で竪穴建物4と重複するが、前後関係は判断できなかった。調査区中央より東側が削平を受けていることを考えると、本来はまだ東側に延びていた可能性もある。溝は幅0.24m、深さ0.09mの断面U字状を呈する。埋土は黒褐色粘土であり、遺物は土師器片が少量出土したが、図化に耐え得るものはなかった。

溝状遺構9 (第34図) 調査区西側で竪穴建物6、7に重複して検出された。重複関係は溝状遺構の方が新しい。幅0.28m、深さ0.34mの断面台形を呈する。埋土は黒褐色粘土であり、レンズ状の堆積が確認できる。埋土中から古墳時代前期の土師器片や礫が出土したが、図化に耐え得るものはなかった。

包含層出土遺物 (第3図、第35図) 調査区西側で表土下に検出されたⅡ層及び、Ⅲa層より遺物の出土がみられた。完形に復元できるものはなかったが、以下、概要の分かるものを報告する。

204と205はⅢa層出土の縄文土器深鉢である。外面に沈線による文様が認められる。特徴から納屋向式土器深鉢と思われる。206はⅢa層出土の土師器壺である。頸部が外傾し二重口縁を呈するが、口縁部の屈曲がゆるやかで、在地系の二重口縁壺とはやや雰囲気異なる。207はⅢa層出土の脚台付小型鉢である。胴部に縦方向のミガキを施すが、口縁部下位でミガキを

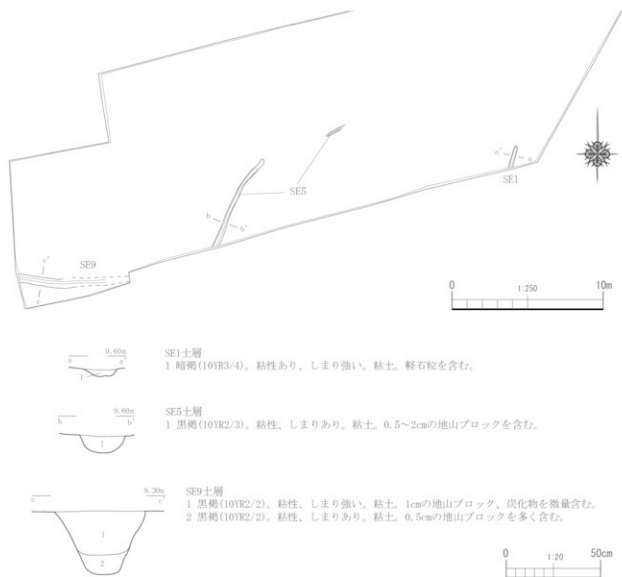


第33図 掘立柱建物10実測図 (S=1/60)

止めることでわずかに段を形成し、口縁部を肥厚させる効果を得ている。口縁部外面に櫛描波状文が施される。

208はII層出土の須恵器坏蓋である。小破片であり全体の形状は不明であるが、やや扁平な全体形を呈すると思われる。209はII層出土の須恵器坏身である。小破片であり全体の形状は不明であるが、受部の返りは明瞭である。

その他の出土遺物(第36図) ここでは、調査中に設定した各トレンチ出土遺物を報告する。210は4トレンチ出土の土師器小型壺である。球形胴を呈すると思われ、胴部外面に縦方向のミガキが施される。211は5トレンチ出土の手づくね鉢である。212～215は竪穴建物6上層土器溜まり検出時に設定した8トレンチ出土遺物である。212は縄文土器深鉢である。文様は

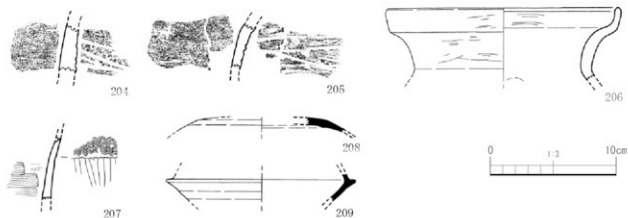


第34図 A区溝状遺構実測図(S=1/250・1/20)

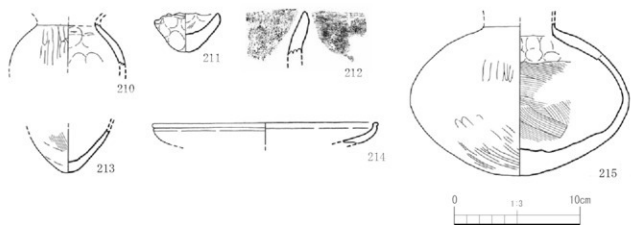
なくナデ仕上げであるが、焼成と胎土の特徴から縄文後期土器の可能性が考えられる。213は土師器小型鉢あるいは壺である。214は土師器器台あるいは鉢である。皿状の口縁部形状を呈し、口縁端部を玉縁状にわずかに外方へ肥厚させる。215は土師器壺である。偏球状胴部の長頸壺と思われる。

小結 A区では、竪穴建物5棟、掘立柱建物1棟、溝状遺構3条、その他柱穴が多数検出された。竪穴建物は北東方向に主軸を向ける3棟(竪穴建物2,6,7)と北西方向に主軸を向ける2棟(竪穴建物3,4)の二者に分類できる。また、平面規模の面からは、一辺が4mを越える竪穴建物3,4,6と、4m以下の竪穴建物2,7に分類できる。これらのうち竪穴建物3と4,6と7は主軸をほぼ同じくして隣接して造られている点が注目される。

調査区西側で確認された包含層からは、縄文時代後期～古墳時代後期の遺物が出土している。このうちⅡ層に含まれる軽石粒は、理化学分析は実施していないものの、肉眼観察では高原スコリアに対応する可能性がある。



第 35 図 包含層出土遺物実測図 (S=1/3)



第 36 図 その他出土遺物実測図 (S=1/3)

第 4 節 古墳時代の遺構と遺物 (B 区)

B 区は、既存園舎の西側に設定した。調査区の土層堆積状況は概ね A 区西側と共通し、0.25m の表土下に III a 層が露出しており、その下位に III b 層、IV 層が堆積する。遺物包含層である III a 層を掘削後、III b 層上面で遺構検出を試みたところ、柱穴 13 基と土坑 1 基を検出した。III a 層及び遺構内から古墳時代前期と思われる土師器小破片が少量出土したが、図化に耐え得るものはなかった。

土坑 11 長軸 1.2m、短軸 1m の隅丸方形あるいは楕円形ともいえる平面形を呈し、深さは 0.35m を測る。床面で柱穴が 3 基検出されたが、土坑に伴うものかどうかは不明である。埋土中から古墳時代前期と思われる土師器小破片が少量出土したが、図化に耐え得るものはなかった。

第2表 出土土器観察表①

掲載順 図番号	番 号	遺構 番号	種 別 器 種	出量cm () : 還元			色 調		焼成	調 整		胎土 (上mm 下mm)					備 考	実 測
				口径	底径	器高	外 面	内 面		外 面	内 面	A	B	C	D	E		
p. 9 第5図	1	SA2	土器器 壺	—	—	—	7.5B6/6 にぶい焼	7.5B5/4	良好	ハケメ、工具ナ ヅラ、ユビオサ エ	ナヅ	1 数 多 僅					168	
	2	SA2	土器器 壺	—	1.8	—	7.5B6/4 にぶい焼	7.5B5/3	良好	ミガキ	ナヅ	3 1 多 少 僅				169		
	3	SA2	土器器 高杯	—	—	—	2.5B5/6 明赤焼	7.5B5/4 にぶい焼	良好	ハケメ後ミガキ	不明瞭	微 微 少 少			微 多	167		
	4	SA2	土器器 鉢	(4.6)	(1.4)	4	5B4/1 焼灰	10B4/1 焼赤灰	良好	ユビオサエ	ユビオサエ	2 微 少 少				170		
p. 10 第6図	5	SA3埋土	縄文 深鉢	—	—	—	10B5/2 灰黄焼	10B6/3 にぶい黄焼	良好	割田突焼、ナヅ	貝殻条痕?	3 微 多 少			微 僅	孔列文	172	
	6	SA3埋土	縄文 深鉢	—	—	—	7.5B7/1 明焼灰	5B5/4 にぶい赤焼	良好	ナヅ	ナヅ	4 微 少 多			微 僅	後彫小	177	
	7	SA3埋土	土器器 壺	—	—	—	10B5/3 にぶい黄焼	7.5B6/4 にぶい焼	良好	ミガキ	ナヅ	2 1 多 少			微 僅	胴部外面：円形浮 文	183	
	8	SA3埋土	土器器 壺	—	4.6	—	10B5/2 灰黄焼	10B6/2 灰黄焼	良好	工具ナヅ ユビオサエ	ナヅ	3 微 多 僅			微 僅		190	
	9	SA3埋土	土器器 壺	(8.2)	—	—	7.5B6/4 にぶい焼	7.5B5/3 にぶい焼	整焼	ヨコナヅ	ナヅ	1 1 少 少			微 僅	口縁部：横線文	184	
	10	SA3埋土	土器器 壺	—	2.8	—	10B6/3 にぶい黄焼	7.5B5/3 にぶい焼	良好	ナヅ	工具ナヅ	3 微 多 少			微 僅	外底面：ナヅ	182	
	11	SA3埋土	土器器 新台	—	(21)	—	10B6/4 にぶい黄焼	10B7/4 にぶい黄焼	良好	ナヅ ミガキか?	ハケメ ヨコナヅ	微 微 僅 僅			微 多		175	
	p. 11 第7図	13	SA3埋土	土器器 壺	(24.4)	2.8	22.9	10B6/6 黄焼	5B6/9 焼	良好	ヨコナヅ	ヨコナヅ、ハケ メ、ナヅ	5 4 多 少			微 僅	レンズ状平底か	14
		14	SA3埋土	土器器 壺	(20.6)	4.6	25.6	7.5B5/3 にぶい焼	7.5B5/3 にぶい焼	良好	ナヅ、ユビオサ エ、ヨコナヅ、 ケズリ	ナヅ	4 2 多 少			微 僅	スス付着 外底面：ナヅ、ユ ビオサエ 内面・ネミ圧痕?	187
		15	SA3埋土	土器器 壺	15.6	—	—	7.5B5/3 にぶい焼	10B6/3 にぶい黄焼	良好	ハケメ、ナヅ、 ユビオサエ、 ケズリ?	ハケメ ナヅ	4.5 1.5 多 少			微 僅	スス付着	189
		16	SA3埋土	土器器 壺	—	—	—	10B6/3 にぶい黄焼	10B6/4 にぶい黄焼	良好	工具ナヅ ナヅ	ハケメ ナヅ	6 微 多 少			微 僅	スス付着	193
17		SA3埋土	土器器 壺	(18.8)	—	—	7.5B6/4 にぶい焼	7.5B6/4 にぶい焼	良好	ヨコナヅ ハケメ	ヨコナヅ ハケメ	2 1 1 多 少 少			微 僅		174	
18		SA3埋土	土器器 壺	(20.3)	—	—	7.5B6/4 にぶい焼	7.5B6/4 にぶい焼	良好	ナヅ	ユビオサエ、ナ ヅ、ハケメ	3 2 多 少			微 僅	口縁部：横線文	196	
19		SA3埋土	土器器 壺	(18.4)	—	—	7.5B6/4 にぶい焼	10B4/2 灰黄焼	良好	準焼に上り不明	ユビオサエ	3 1 多 多			微 僅	口縁部：横線文	171	
20		SA3埋土	土器器 壺	—	—	—	7.5B7/4 にぶい焼	7.5B7/4 にぶい焼	良好	ナヅ ミガキ	ナヅ	2 微 多 僅			微 僅		191	
21		SA3埋土	土器器 壺	—	1.2	—	10B6/3 にぶい黄焼	10B5/2 灰黄焼	良好	ハケメ、ナヅ ケズリ	ハケメ、ナヅ 、ユビオサエ	2 2 2 多 多 少			微 僅		194	
22		SA3埋土	土器器 壺	—	5.4	—	7.5B6/4 にぶい焼	10B6/3 にぶい黄焼	良好	ケズリ	ナヅ ユビオサエ	2 2 1 多 少 少			微 僅	外底面：ナヅ	180	
p. 12 第8図	23	SA3埋土	土器器 高杯	19.8	—	—	7.5B6/4 にぶい焼	10B6/4 にぶい黄焼	良好	ミガキ 接合痕	ミガキ 接合痕	3 1 1 多 多 少			微 僅		192	
	24	SA3埋土	土器器 高杯	—	—	—	5B6/6 焼	5B6/6 焼	良好	ミガキ	ミガキ	2 1 多 少			微 僅		188	
	25	SA3埋土	土器器 新台	(17.6)	—	—	7.5B6/4 にぶい焼	7.5B6/4 にぶい焼	良好	ミガキ	ミガキ	2 微 少 少			微 僅		197	
	26	SA3埋土	土器器 高杯	—	(6.4)	—	10B6/3 にぶい黄焼	7.5B6/4 にぶい焼	良好	ナヅ ユビオサエ	ナヅ	1 微 多 僅			微 僅		195	
	p. 14 第10図	31	SA4埋土	縄文 深鉢	—	—	—	7.5B4/1 焼灰	5B4/3 にぶい赤焼	良好	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナヅ	1 1 少 多			微 僅	丸尾式 スス付着	201
32		SA4埋土	土器器 壺	—	4.9	—	10B5/2 灰黄焼	10B6/3 にぶい黄焼	良好	ナヅ ユビオサエ	ナヅ	5 微 多 僅			微 僅	外底面：ナヅ	200	
33		SA4埋土	土器器 壺	—	—	—	7.5B5/2 灰焼	7.5B5/3 にぶい焼	良好	ハケメ ケズリ	ナヅ、ユビオサ エ、ハケメ	3 1 1 多 少 僅			微 僅	胴部：條列	223	

※胎土 A: 宜崎小石 B: 長石・石英 C: 輝石・角閃石 D: 雲母 E: 黒炭

第3表 出土土器観察表②

掲載順 図番号	番 号	遺構 等	種 別 器 種	法量cm () : 底元			色 調		焼成	調 整		胎土(上mm 下量)					備 考	実測	
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	A	B	C	D	E			
p.14 第10 図	34	SA床	土師器 鉢	—	(6.8)	—	10YR6/2 灰黄褐色	にぶい焼	良好	ミガキ	ナブ						外底面: ユビオサ エ、ナブ	198	
	35	SA床	土師器 跗台	—	(13.1)	—	7.5YR6/4 にぶい焼	にぶい焼	良好	ミガキ	ハケメ	1	微 多	少				199	
p.16 第12 図	39	SA6上	土師器 甕	(36.4)	—	—	7.5YR7/4 にぶい焼	にぶい黄焼	良好	ヨコナデ、ハケ メ	ヨコナデ	4	2				31		
	40	SA6上	土師器 甕	25.7	6.5	33.9	10YR7/4 にぶい黄焼	にぶい黄焼	良好	ハケメ、ナブ、 ユビオサエ	ハケメ、ナブ、 ユビオサエ	3	1			スス付着 外底面: ユビオサ エ	52		
	41	SA6上	土師器 甕	26.9	7.4	19.6	7.5YR7/4 にぶい焼	7.5YR7/6 焼	良好	ヨコナデ、ハケ メ、ナブ、ケズ メ、ナブ	ヨコナデ、ハケ メ、ナブ	4	微 多	少				5	
p.17 第13 図	42	SA6上	土師器 甕	23.4	—	—	7.5YR8/6 浅黄褐色	7.5YR7/6 焼	良好	タタキ後ナブ、 ナブ、ユビオサ エ	ナブ、ハケメ、 工具痕	3	1				2		
	43	SA6上	土師器 甕	(27.0)	—	—	10YR8/4 浅黄褐色	7.5YR7/4 にぶい焼	良好	ハケメ	ハケメ	3	微 多	低				76	
	44	SA6上	土師器 甕	(21.2)	—	—	10YR6/3 にぶい黄焼	10YR7/4 にぶい黄焼	良好	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ	2	0.5	0.5			頸部刻目突帯	38	
	45	SA6上	土師器 甕	(20.4)	4.1	23.3	10YR8/3 浅黄褐色	10YR7/3 にぶい黄焼	良好	ハケメ、ナブ	ハケメ	5	2					43	
	46	SA6上	土師器 甕	(14.9)	(4.6)	19.2	10YR7/4 にぶい黄焼	7.5YR7/4 にぶい焼	良好	工具痕、ナブ、 ユビオサエ、ヨ コナデ	ナブ、ハケメ、 ユビオサエ	3	1	1				46	
	47	SA6上	土師器 甕	13.5	4.5	17.9	7.5YR7/6 焼	10YR7/4 にぶい黄焼	良好	ユビオサエ、ナ 具ナブ	ユビオサエ、工 具ナブ	4	微 多	低				42	
	48	SA6上	土師器 甕	(20.0)	—	—	10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	良好	ヨコナデ ナブ	ヨコナデ ハケメ	4	2					39	
p.18 第14 図	49	SA6上	土師器 甕	(17.6)	—	—	10YR6/3 にぶい黄焼	10YR7/3 にぶい黄焼	良好	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ	3	0.5					77	
	50	SA6上	土師器 甕	(16.8)	—	—	7.5YR4/2 にぶい焼	7.5YR5/3 にぶい焼	良好	ヨコナデ	ヨコナデ ナブ	4	2	2			スス付着	94	
	51	SA6上	土師器 甕	(18.2)	—	—	7.5YR6/4 にぶい焼	10YR5/3 にぶい黄焼	良好	ハケメ	ハケメ	5						61	
	52	SA6上	土師器 甕	(17.2)	—	—	10YR7/3 にぶい黄焼	10YR7/3 にぶい黄焼	良好	工具ナブ、ユビ オサエ、ハケメ	工具ナブ、ユビ オサエ、ハケメ	3	微 多	微 低					91
	53	SA6上	土師器 甕	(15.4)	—	—	7.5YR7/4 にぶい焼	10YR6/3 にぶい黄焼	良好	ハケメ、工具ナ ブ後ナブ、タタ キ後ナブ	工具ナブ	4	微 多	少				60	
	54	SA6上	土師器 甕	(17.6)	—	—	7.5YR5/4 にぶい焼	7.5YR6/4 にぶい焼	良好	割罫により不明	ナブ?	1	1				スス付着	97	
	55	SA6上	土師器 甕	(21.8)	—	—	7.5YR5/3 にぶい焼	7.5YR7/4 にぶい焼	良好	ハケメ	ハケメ ヨコナデ	3	3				スス付着	58	
	56	SA6上	土師器 甕	(19.3)	—	—	7.5YR7/4 にぶい焼	10YR6/3 にぶい黄焼	良好	ハケメの後ナブ	ナブ ユビオサエ	3	1		微 多			155	
	57	SA6上	土師器 甕	16.8	1.7	16.9	7.5YR7/4 にぶい焼	7.5YR7/6 焼	良好	ユビオサエ、ナ ブ、ケズリ?	ユビオサエ、ナ ブ	3	1	1			タタキ痕か? (頸 部外面)	29	
	58	SA6上	土師器 甕	—	(7.6)	—	7.5YR6/4 にぶい焼	10YR5/2 灰黄褐色	良好	ハケメ、ナブ	風化の為不明	3	2	1			外底面: ナブ?	137	
p.19 第15 図	59	SA6上	土師器 甕?	—	8	—	10YR7/3 にぶい黄焼	10YR6/2 灰黄褐色	良好	ナブ ユビオサエ	工具ナブ	2	2				外底面: ナブ	226	
	60	SA6上	土師器 甕	—	5.2	—	7.5YR6/4 にぶい焼	7.5YR6/4 にぶい焼	良好	工具ナブ(タタ キ痕)、ユビオ サエ	工具ナブ	4	2				外底面: ナブ	134	
	61	SA6上	土師器 甕	—	5.3	—	10YR6/4 にぶい黄焼	10YR5/2 灰黄褐色	良好	ハケメ	ナブ	3	1.5				外底面: ナブ 内面: 炭化物付着	126	
	62	SA6上	土師器 甕	—	(6.2)	—	7.5YR5/3 にぶい焼	7.5YR5/3 にぶい焼	良好	ナブ	不明	2		微 多			外底面: ナブ	129	
	63	SA6上	土師器 甕	—	3.9	—	10YR7/2 にぶい黄焼	10YR5/3 にぶい黄焼	良好	工具ナブ ユビオサエ	ナブ ハケメ	5	2.5				外底面: ナブ	120	
	64	SA6上	土師器 甕	—	4.5	—	10YR6/3 にぶい黄焼	7.5YR6/4 にぶい焼	良好	ナブ	ハケメ ユビオサエ	3.5	2				内面: 赤瓦痕	128	

胎土: A: 宜崎小石 B: 長石・石英 C: 輝石・角閃石 D: 雲母・黒染

第4表 出土土器観察表③

掲載頁 図番号	番 号	遺構 器 種	出量cm () : 復元	色 調		焼成	調 整		胎土(上:裏 下:裏)					備 考	実測				
				口徑	底徑		器高	外 面	内 面	外 面	内 面	A	B			C	D	E	
p. 19 第15 図	65	SA6上	土師器 壺	—	3.6	—	10Y85/3 にぶい・黄緑	7.5Y85/3 にぶい・純	良好	ナデ	ナデ	3	1				外底面：ナデ、椀 状の調整痕	132	
	66	SA6上	土師器 壺	—	7.6	—	7.5Y85/4 にぶい・純	5Y85/4 にぶい・赤褐	やや不 明		スピオサエ	3	1					111	
	67	SA6上	土師器 壺	—	4.3	—	10Y85/3 にぶい・黄緑	7.5Y85/3 にぶい・純	良好	ナデ スピオサエ	ナデ ハケメ	4	数				外底面：スピオサ エ、スス付着	118	
	68	SA6上	土師器 壺	—	4.4	—	10Y87/3 にぶい・黄緑	10Y87/4 にぶい・黄緑	良好	ケズリ スピオサエ	ハケメ、ナデ、 スピオサエ	5	0.5						26
	69	SA6上	土師器 壺	—	(5.6)	—	10Y85/3 にぶい・黄緑	10Y85/3 にぶい・黄緑	良好		ハケメ スピオサエ	3	1.5				外底面：指でつま んだ痕ナデ	108	
	70	SA6上	土師器 壺	—	5.2	—	7.5Y85/4 にぶい・純	7.5Y85/4 にぶい・純	良好	ケズリ スピオサエ	ハケメ、スピオ サエ、シボリ痕	3.5	数				外底面：スピオサ エ、ナデ	124	
	71	SA6上	土師器 壺	—	5.7	—	10Y85/3 にぶい・黄緑	10Y85/3 にぶい・黄緑	良好	ケズリ スピオサエ	ナデ	5	1.5	1			外底面：ナデ スス付着？	116	
	72	SA6上	土師器 壺	—	4.7	—	7.5Y85/4 にぶい・純	7.5Y85/4 にぶい・純	良好	スピオサエ	工具ナデ スピオサエ	6	数				外底面：スピオサ エ、ナデ、被熱	125	
	73	SA6上	土師器 壺	—	5.6	—	10Y85/3 にぶい・黄緑	10Y85/3 にぶい・黄緑	良好	スピオサエ ナデ	ナデ	1	1	1			外底面：スピオサ エ	121	
	74	SA6上	土師器 壺	—	5.8	—	7.5Y85/3 にぶい・純	7.5Y84/2 灰褐	良好	工具ナデ スピオサエ	工具ナデ スピオサエ	3.5	1				外底面：スピオサ エ、ナデ	119	
	75	SA6上	土師器 壺	—	5.1	—	10Y85/3 にぶい・黄緑	10Y84/1 焼灰	良好	ケズリ スピオサエ	工具ナデ スピオサエ	4.5	1	1			底面：ナデ、スピ オサエ	115	
	76	SA6上	土師器 壺	—	2.8	—	7.5Y85/4 にぶい・純	2.5Y4/1 黄灰	良好	ナデ、スピオサ エ	工具ナデ スピオサエ	3	数	2			外底面：ナデ	131	
	77	SA6上	土師器 壺	—	5.2	—	10Y85/3 にぶい・黄緑	10Y84/2 灰黄褐	良好	工具ナデ スピオサエ	工具ナデ	3	1				外底面：ナデ、スピ オサエ	117	
	78	SA6上	土師器 壺	—	5.0	—	10Y85/2 にぶい・純	5Y85/2 灰褐	良好	スピオサエ、工 具ナデ(ケズリ 痕)	工具ナデ スピオサエ	2	0.5				外底面：スピオサ エ	123	
	79	SA6上	土師器 壺	—	5.0	—	7.5Y85/4 にぶい・純	10Y85/3 にぶい・黄緑	良好	ナデ スピオサエ	工具ナデ	3	1.5	2			外底面：工具ナデ の後ナデ	113	
80	SA6上	土師器 壺	—	5.0	—	7.5Y85/4 にぶい・純	5Y85/6 純	良好	ナデ スピオサエ	ナデ スピオサエ	3	1	1			外底面：木葉痕	110		
p. 20 第16 図	81	SA6上	土師器 壺	21.8	—	—	10Y87/4 にぶい・黄緑	10Y87/4 にぶい・黄緑	良好	ハケメ タタキ	ハケメ	4	2					50	
	82	SA6上	土師器 壺	20.02	—	—	10Y85/3 浅黄緑	7.5Y88/4 浅黄緑	良好	ハケメ、タタ キ、ケズリ	ナデ ハケメ	4	数					35	
	83	SA6上	土師器 壺	18.1	3.9	26.6	10Y87/4 にぶい・黄緑	10Y87/4 にぶい・黄緑	良好	タタキ、ナデ、 ケズリ	ハケメ	4	3					1	
	84	SA6上	土師器 壺	(18.4)	—	—	10Y88/4 浅黄緑	10Y88/4 浅黄緑	良好	タタキ後ナデ	ナデ ハケメ	2	2	2			タタキ目をナデ削 している	86	
	85	SA6上	土師器 壺	—	—	—	10Y88/2 灰白	10Y88/2 灰白	良好	ヨコナデ、ハタ キ後ヨコナデ タタキ	ヨコナデ ハケメ	3	2						67
	86	SA6上	土師器 壺	(12.8)	—	—	7.5Y85/4 にぶい・純	7.5Y85/4 にぶい・純	良好	タタキ ハケメ	ハケメ	2	1	1					84
	87	SA6上	土師器 壺	—	—	—	10Y88/4 浅黄緑	10Y88/4 浅黄緑	良好	タタキ後スピオ サエ、タタキ	ハケメ	4	2						41
	88	SA6上	土師器 壺	—	8.6	—	5Y87/6 純	7.5Y85/1 焼灰	良好	タタキ後ケズリ 調ナデ	ナデ	3	2						136
	89	SA6上	土師器 壺	—	(5.1)	—	7.5Y85/4 にぶい・純	10Y83/1 黒褐	良好	タタキ後ナデ スピオサエ	工具ナデ スピオサエ	3	1				外底面：ナデ、椀 合痕	127	
	90	SA6上	土師器 壺	—	3.4	—	10Y87/3 にぶい・黄緑	10Y88/2 灰白	良好	工具ナデ、タタ キ、スピオサエ	ハケメ	2	1				数 値		37
p. 21 第17 図	91	SA6上	土師器 壺	—	—	—	10Y86/4 にぶい・黄緑	2.5Y5/1 黄灰	良好	工具ナデの後ナ デ、スピオサエ	工具ナデの後ナ デ、スピオサエ	4	2					104	
	92	SA6上	土師器 壺	—	3.1	—	10Y87/6 明黄緑	10Y85/3 にぶい・黄緑	良好	ハケメ	ハケメ	2	1	1				32	
	93	SA6上	土師器 壺	—	(6.7)	—	7.5Y85/6 純	10Y87/3 にぶい・黄緑	良好	ハケメ ナデ	工具ナデ	2	1					19	

参照土：A:京崎小石 B:長石・石炭 C:輝石・角閃石 D:雲母 E:黒炭

第5表 出土土器観察表④

掲載 頁番号	番 号	遺構 番号	種別 器種	出量cm() : 復元			色調		焼成	調整		胎土(上mm 下mm)					備考	実 測
				口徑	底徑	器高	外面	内面		外面	内面	A	B	C	D	E		
				単位	単位	単位	単位	単位		単位	単位	単位	単位	単位	単位	単位		
p.22 第18 図	94	SA6上	土師器 壺	(13.1)	—	42.1	10198/4 浅黄緑	10197/3 にぶい黄緑	良好	ハケメ ケズリ	ハケメ	3	1	1	微		21	
	95	SA6上	土師器 壺	(12.8)	5.1	34.9	7.5198/6 浅黄緑	7.5198/6 浅黄緑	良好	ヒガキ	摩耗により不明 磨	3	1	1	微		13	
p.23 第19 図	96	SA6上	土師器 壺	—	3.8	—	10198/4 浅黄緑	7.5197/6 緑	良好	摩耗により不明 磨	シロゾリ痕	4	2	2	微		23	
	97	SA6上	土師器 壺	—	—	—	10195/3 にぶい黄緑	7.5195/3 にぶい緑	良好	工具ナデ	ナデ ユビオサエ	2	微	1	微	外底面：ワラ、モ ミ灰痕	101	
	98	SA6上	土師器 壺	17.1	—	—	10198/4 浅黄緑	10197/4 にぶい黄緑	良好	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ	4	1	—	—	口縁部：櫛状工具 による削突文	47	
	99	SA6上	土師器 壺	(13.6)	—	—	7.5196/4 にぶい緑	5196/4 にぶい緑	良好	風化の為不明	工具ナデ ユビオサエ	5	2	—	—		99	
	100	SA6上	土師器 壺	—	—	—	7.5198/4 浅黄緑	7.5198/6 浅黄緑	良好	ハケメ	ハケメ、ユビオ サエ、ナデ	4	1	—	—		16	
	101	SA6上	土師器 壺	—	5.7	—	2.5196/6 緑	5195/4 にぶい赤褐	良好	ナデ ユビオサエ	ユビオサエ	3	3	—	—		107	
	102	SA6上	土師器 壺	—	3.0	—	2.515/3 にぶい赤褐	5195/4 にぶい赤褐	良好	不明	不明	4	微	—	—		230	
p.24 第20 図	103	SA6上	土師器 壺	(14.7)	(3.6)	23.9	7.5197/6 緑	10198/4 浅黄緑	良好	ハケメ、ナデ、 タタキ	ハケメ ユビオサエ	2	1	微	—		36	
	104	SA6上	土師器 壺	16.3	3.2	26.5	10198/4 浅黄緑	10198/4 浅黄緑	良好	ハケメ、ナデ、 工具ナデ	ヨコナデ、ユビ オサエ、ハケメ	2	1	1	少		18	
	105	SA6上	土師器 壺	—	2.8	20.0	10198/3 浅黄緑	10198/3 浅黄緑	良好	ヨコナデ、ハケ メ後工具ナデ、 ケズリ(ヒガキ)	ヨコナデ、ユビ オサエ、工具ナ デ、ハケメ	3	1	—	—	胴部内面：櫛状文 内底面：粘土充填	30	
	106	SA6上	土師器 壺	(8.7)	—	21.8	7.5197/6 緑	7.5197/8 黄緑	良好	ユビオサエ ナデ、ケズリ	ユビオサエ ナデ、ハケメ	2	微	—	—		10	
	107	SA6上	土師器 壺	14.6	—	—	10198/3 浅黄緑	10198/4 浅黄緑	良好	ハケメ ナデ	ユビオサエ ハケメ	2	1	1	少	胴部外面に櫛刻	4	
p.25 第21 図	108	SA6上	土師器 壺	—	—	—	10198/3 浅黄緑	2.5197/3 浅黄緑	良好	ハケメ ケズリ	ハケメ、ナデ、 ユビオサエ	3	1	—	—	胴部外面に櫛刻	11	
	109	SA6上	土師器 壺	—	(3.6)	—	10196/4 にぶい黄緑	10196/3 にぶい黄緑	良好	ハケメ 工具ナデ	ハケメ ユビオサエ	4	1	—	—	外底面：ナデ	138	
	110	SA6上	土師器 壺	—	0.4	15.9	7.5198/6 浅黄緑	7.5197/6 緑	良好	ハケメ ケズリ	ハケメ、ユビオ サエ、ナデ	4	1	—	—	胴部から外底面： 櫛刻	17	
	111	SA6上	土師器 壺	—	4.0	—	10197/2 にぶい黄緑	10197/4 にぶい黄緑	良好	ヒガキ、工具ナ デ	ユビオサエ、ハ ケメ、工具ナデ	4	2	2	微		20	
	112	SA6上	土師器 壺	—	—	—	10198/4 浅黄緑	10198/4 浅黄緑	良好	ハケメ ハケメ後ナデ	ハケメ、ユビオ サエ、ハケメ後 ナデ	1	1	1	微		44	
	113	SA6上	土師器 壺	(10.8)	—	—	7.5197/4 にぶい緑	10196/3 にぶい黄緑	良好	工具ナデ ナデ	ナデ、工具ナ デ、ユビオサエ	4	—	—	—		59	
p.26 第22 図	114	SA6上	土師器 壺	(17.5)	—	—	7.5196/4 にぶい緑	10196/3 にぶい黄緑	良好	ハケメ後ヨコナ デ	ナデ	4	1	1	—		143	
	115	SA6上	土師器 壺	18.6	—	—	7.5197/6 緑	10198/4 浅黄緑	良好	ハケメ ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ メ、ユビオサエ	3	1	1	—	口縁部：櫛状文	24	
	116	SA6上	土師器 壺	(17.1)	—	—	7.5195/4 にぶい緑	7.5195/4 にぶい緑	良好	不明	ナデ	3	1	—	—		158	
	117	SA6上	土師器 壺	(15.5)	—	—	2.5197/8 緑	5197/8 緑	良好	摩耗により不明 磨	ヨコナデ、ナ デ、ユビオサエ	3	2	—	—	口縁部：櫛状工具 による削突文	79	
	118	SA6上	土師器 壺	(15.0)	—	—	7.5197/6 緑	7.5197/7 緑	良好	ハケメ	ヨコナデ ハケメ	3	1	—	微	口縁部：櫛状文	28	
	119	SA6上	土師器 壺	(15.6)	—	—	7.5198/6 浅黄緑	7.5197/6 緑	良好	ナデ ハケメ	ナデ ハケメ	2	微	1	微	口縁部：櫛状文	83	
	120	SA6上	土師器 壺	(13.2)	—	—	7.5197/4 にぶい緑	10195/2 灰黄緑	良好	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ	4	微	0.5	—		65	
	121	SA6上	土師器 壺	(13.7)	—	—	7.5195/4 にぶい緑	1065/3 赤褐	良好	ハケメ、ナデ、 ユビオサエ、 ヒガキ	ヒガキ、ユビオ サエ、ハケメ	3	1	—	—	ガラス質の鉱物を 多く含む	82	

※胎土 A:京崎小石 B:長石・石英 C:輝石・角閃石 D:雲母 E:黒炭

第6表 出土土器観察表⑤

掲載頁 図番号	番 号	遺構 器 種	出量cm ()	元			色 調		焼成	調 整		胎土 (上mm 下mm)					備 考	実 測
				口径	底径	器高	外 面	内 面		外 面	内 面	A	B	C	D	E		
p. 26 第23 図	122	SA6上	土師器 壺 (11.2)	—	—	—	7.5/86/4 にぶい・黄	7.5/86/4 にぶい・黄	良好	風化の為不明	風化の為不明	3	1				80	
	123	SA6上	土師器 壺 (13.2)	—	—	—	10/86/3 にぶい・黄	10/86/3 にぶい・黄	良好	ナブ	ナブ	3	2			口縁部：縹結文	64	
	124	SA6上	土師器 壺	—	—	—	10/86/2 灰黄褐色	7.5/86/3 にぶい・黄	良好	ナブ ヨコナブ	ヨコナブ	1	1	1		口縁部：縹結文	57	
	125	SA6上	土師器 壺	—	(3.0)	19.9	5/87/6 黄	10/86/4 にぶい・黄	良好	ハケメ ナブ	ハケメ ナブ	5	2				3	
	126	SA6上	土師器 壺	—	0.8	—	10/87/4 にぶい・黄	10/87/3 にぶい・黄	良好	ケズリ	ケズリ後工具ナ ブ	2	1	1		内面：モミ圧痕	22	
	127	SA6上	土師器 壺	—	—	—	7.5/87/4 にぶい・黄	10/86/3 にぶい・黄	良好	ナブ ハケメ	ナブ	2	1				114	
p. 27 第24 図	128	SA6上	土師器 壺	—	2.0	—	5/85/6 明赤褐色	5/84/6 赤褐色	良好	ハケメ ユビオサエ	ハケメ ユビオサエ	3	0.5	1			34	
	129	SA6上	土師器 壺	—	1.8	—	10/86/4 にぶい・黄	7.5/86/4 にぶい・黄	良好	ナブ?	ナブ?	3.5	1			外底面：ナブ?	135	
	130	SA6上	土師器 壺	—	5.0	—	7.5/86/4 にぶい・黄	7.5/85/4 にぶい・黄	良好	ナブ ユビオサエ	ナブ	4	3			外底面：ユビオサ エ、ケズリ	109	
	131	SA6上	土師器 壺	—	2.6	—	7.5/87/4 にぶい・黄	10/86/3 にぶい・黄	良好	工具ナブ ユビオサエ	工具ナブ ユビオサエ	3	2			外底面：工具ナブ	106	
	132	SA6上	土師器 壺	—	3.9	—	10/86/4 にぶい・黄	10/86/3 にぶい・黄	良好	ナブ後継いこ ギ	ナブ	0.5	1	1		外底面：ナブ 胴部下位に縹刺	130	
	133	SA6上	土師器 壺	18.0	—	—	7.5/86/4 にぶい・黄	7.5/86/4 にぶい・黄	良好	ミガキ	ミガキ	1	1				228	
	134	SA6上	土師器 壺 (15.5)	—	—	—	7.5/86/4 にぶい・黄	5/86/6 黄	良好	ミガキ	ユビオサエ	5	1	1			74	
	135	SA6上	土師器 壺 (13.8)	—	—	—	7.5/86/3 にぶい・黄	7.5/86/3 にぶい・黄	良好	ミガキ	ミガキ	1.5	1	1		スス付着	229	
	136	SA6上	土師器 壺 (17.4)	—	—	—	10/86/3 にぶい・黄	7.5/86/4 にぶい・黄	良好	ヨコナブ後継 ギ	ミガキ	3	1	1			69	
	137	SA6上	土師器 小型壺 (10.2)	—	—	—	7.5/87/6 黄	7.5/86/6 黄	良好	ハケメ ナブ	ヨコナブ ミガキ	0.5	1	1		口縁部：縹結文	51	
	138	SA6上	土師器 小型壺	—	—	—	10/88/4 浅黄褐色	10/87/4 にぶい・黄	良好	ミガキ	ナブ	1	1	1		口縁部：縹結文	49	
	139	SA6上	土師器 小型壺	2.6	7.7	8.0	10/88/3 浅黄褐色	10/88/3 浅黄褐色	良好	ヨコナブ ナブ	ヨコナブ、ハケ メ、ナブ	2	1	1			9	
	140	SA6上	土師器 小型壺	—	1.1	—	10/86/6 明黄褐色	7.5/84/4 黄	良好	ハケメ ユビオサエ	ナブ ユビオサエ	1	1	1		胴部に内→外の焼 成後穿孔	7	
	141	SA6上	土師器 小型壺 (7.5)	—	—	—	7.5/86/4 にぶい・黄	10/86/3 にぶい・黄	良好	ナブ ミガキ	ナブ	1	1	0.5			63	
142	SA6上	土師器 小型壺 (6.2)	—	—	—	7.5/85/1 赤灰	7.5/85/2 灰褐色	良好	ヨコナブ	ヨコナブ	1	1				54		
p. 28 第24 図	143	SA6上	土師器 小型壺	—	—	—	7.5/86/4 にぶい・黄	10/83/1 黒褐色	良好	ナブ ケズリ	ナブ ユビオサエ	3	2				150	
	144	SA6上	土師器 小型壺	—	1	—	5/86/6 黄	7.5/84/3 黄	良好	工具痕	ユビオサエ	4.5	1	1		器表面剥落	149	
	145	SA6上	土師器 高杯	38.8	—	—	10/86/4 にぶい・黄	7.5/86/6 黄	良好	ミガキ	ミガキ	1	1				12	
	146	SA6上	土師器 高杯 (32.4)	—	—	—	10/88/4 浅黄褐色	10/88/4 浅黄褐色	良好	ミガキ	ナブ、ハケメ、 ミガキ	1	1	1			25	
	147	SA6上	土師器 高杯 (34.4)	—	—	—	7.5/86/4 にぶい・黄	10/87/4 にぶい・黄	良好	ハケメ、ヨコナ ブ後継いこ ギ	ミガキ	2	1	1			73	
	148	SA6上	土師器 高杯	—	—	—	10/86/3 にぶい・黄	10/86/3 にぶい・黄	良好	ヨコナブ、ハケ メ後継文状 ミガキ	ハケメ ミガキ	0.5	0.5	0.5			48	
	149	SA6上	土師器 高杯 (25.2)	—	—	—	10/86/4 にぶい・黄	10/86/4 にぶい・黄	良好	ヨコナブ後継 文状ミガキ	ミガキ	1	1	1			165	

赤胎土 A: 黄褐色小石 B: 長石・石英 C: 輝石・角閃石 D: 雲母 E: 黒炭

第7表 出土土器観察表⑥

掲載頁 図番号	番 号	遺構 器 型	種 別 器 種	出量cm () 還元			色 調		焼成	調 整		胎土 (上mm 下mm)					備 考	実 測
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	A	B	C	D	E		
p.28 第24 図	150	SA6上	土器器 高杯	—	—	—	10YR6/3	10YR6/3	良好	ミガキ	ミガキ、ホメ リ、ナデ、ユビ オサエ	2	1	1			163	
	151	SA6上	土器器 高杯	—	20.4	—	10YR7/4	10YR7/4	良好	ミガキ	ハクメ ナデ	1	1	1		肩部に4つの穿 孔、脚外面に焼成 破損痕	27	
p.29 第25 図	152	SA6上	土器器 高杯	—	(18.8)	—	7.5YR6/4	7.5YR6/4	良好	ミガキ	不明瞭	1	1		微 少		146	
	153	SA6上	土器器 高杯	—	—	—	7.5YR6/4	7.5YR5/3	良好	ミガキ	ナデ ケズリ	3	微 多				162	
		154	SA6上	土器器 高杯	—	—	—	10YR6/4	10YR5/3	良好	ミガキ	ケズリ	微 少					225
	155	SA6上	土器器 高杯	—	—	—	7.5YR6/4	7.5YR5/3	良好	ミガキ	ミガキ、ユビオ サエ、ナデ、ユ ビオサエ	5	1.6				164	
		156	SA6上	土器器 高杯	—	—	—	7.5YR6/4	7.5YR5/4	良好	不明瞭	ナデ	1	1	1		外底面：ユビオサ エ	141
	157	SA6上	土器器 鉢	10.8	3.0	14.9	5YR7/6 微	5YR7/6 微	良好	摩耗により不明 瞭	ヨコナデ、ハク メ、ナデ	3	2	1			8	
		158	SA6上	土器器 鉢	14.6	—	(8.8)	5YR7/6 微	10YR7/3	良好	ヨコナデ、ハク メ後ナデ、ハク メ	ヨコナデ ハクメ	1	1				45
	159	SA6上	土器器 鉢	—	2.9	—	7.5YR6/4	7.5YR6/4	良好	ナデ	ナデ	2	微 多			外底面：ナデ	133	
		160	SA6上	土器器 鉢	—	1.9	—	10YR6/3	7.5YR5/3	良好	ナデ	ナデ	2	1			外底面：ナデ	152
	161	SA6上	土器器 鉢?	(30.8)	—	—	5YR6/6 微	2.5YR6/6 微	良好	ハクメ	風化の為不明	3	2	2			157	
		162	SA6上	土器器 鉢	—	—	—	10YR7/6 明黄褐色	10YR8/6 黄褐色	良好	ナデ後ミガキ	ヨコナデ、ミガ キ、ナデ	2	2	1			66
	163	SA6上	土器器 鉢	(32.5)	—	—	10YR7/4	10YR6/4	良好	ミガキ ヨコナデ	ミガキ	1	微 多			口縁部が粘土製付 けにより肥厚する	72	
		164	SA6上	土器器 鉢	(21.7)	—	—	10YR6/3	7.5YR6/4	良好	ハクメ、ヨコナ デ後ミガキ	ナデ?後ミガキ	3	1				92
	165	SA6上	土器器 鉢	—	5.9	—	7.5YR6/4	7.5YR6/4	良好	粗いミガキ	ミガキ	3	微 多	1		外底面：ナデ?	139	
		166	SA6上	土器器 台付鉢	—	9.2	—	7.5YR5/4	7.5YR6/4	良好	ナデ?	ハクメホ	3	1			外底面：ナデ?	112
167	SA6上	土器器 有孔鉢	—	—	—	7.5YR6/4	10YR6/3	良好	縦方向の工具ナ デ(ややケズリ)	工具ナデの後ナ デ	3	1			底面に孔有り	105		
	168	SA6上	土器器 器台	(36.6)	—	—	7.5YR6/4	7.5YR6/4	良好	ナデ	ナデ	3	1	微 多		口縁部：磨損文	159	
169	SA6上	土器器 器台	—	24.5	—	5YR7/6 微	5YR7/6 微	良好	ハクメ、ミガ キ、ナデ	ミガキ ケズリ	2	微 多	2		3ヶ所穿孔あり	33		
	170	SA6上	土器器 器台	—	—	—	7.5YR8/6 浅黄褐色	7.5YR7/6 微	良好	ミガキ	ハクメ後ナデ、 少ボリ痕、ヨコ ナデ	1	1		微 少	外底面：ハラケズ リ	147	
171	SA6上	土器器 器台	—	(18.9)	—	7.5YR7/4	10YR7/3	良好	ミガキ	ヨコナデ ケズリ	2	微 多	1			145		
	172	SA6上	土器器 器台	(16.0)	—	—	10YR6/3	10YR6/3	良好	ヨコナデ ハクメ	ヨコナデ ハクメ	4	4				53	
173	SA6上	土器器 器台	(10.2)	—	—	7.5YR7/4	7.5YR7/4	良好	ミガキ	ナデ 工具ナデ		微 多				56		
	174	SA6上	土器器 器台	—	—	—	7.5YR6/4	7.5YR4/1 褐色	良好	ミガキ	ナデ	微 微					142	
175	SA6上	土器器 壺	(5.4)	—	8.7	7.5YR6/4	10YR3/1 黒褐色	良好	摩滅	ユビオサエ	3	2	1			148		
	176	SA6上	土器器 鉢	8.6	—	6.4	10YR8/4	10YR5/2 浅黄褐色	良好	ユビオサエ	ナデ	2	1	1		外面：菊渦 外底面：ユビオサ エ	40	
177	SA6上	土器器 鉢	5.1	0.9	2.3	10YR6/4	10YR4/2	良好	ユビオサエ	ユビオサエ	3	1			外底面：ナデ	151		
						にぶい黄褐色					多 少							

赤粘土 A:黄褐色 B:赤褐色 C:黒褐色 D:黄褐色 E:黒褐色

第8表 出土土器観察表⑦

掲載頁 図番号	番 号	遺構 等	種 別 器 種	出量cm (): 還元			色 調		焼成	調 整		胎土 (上:mm 下:mm)					備 考	実 測
				口径	底径	器高	外 面	内 面		外 面	内 面	A	B	C	D	E		
p.30 第26 図	178	SA6上	土師器 鉢*	(13.0)	—	—	7.5B5/4 にぶい橙	7.5B5/4 にぶい橙	良好	タタキ ユビオサエ	工具ナゲ	3	1	1			※み大きい	140
	179	SA6上	土師器 杓子	—	—	(17.8)	10B8/4 浅黄橙	10B8/4 浅黄橙	良好	ユビオサエ、 ナゲ		1	1				15	
	180	SA6上	縄文 深鉢	—	—	—	5B5/3 にぶい赤褐	7.5B5/3 にぶい褐	良好	貝殻燻灰文 貝殻燻灰	貝殻燻灰	3	数		1	多	丸尾式 スス付着	186
p.30 第30 図	195	SA6P*	土師器 鉢	26.2	—	(15.0)	10B8/4 浅黄橙	10B8/4 浅黄橙	良好	ヨコナゲ、ハケ メ後ミガキ、ケ ズリ	ヨコナゲ、ミガ キ、ケズリ	3	数				6	
	196	SA6P*	土師器 甕	—	—	—	10B5/3 にぶい黄褐	7.5B5/4 にぶい褐	良好	工具ナゲ ナゲ	ハケメ	3	多				153	
	197	SA6P*	土師器 甕	10.9	—	—	10B6/4 にぶい赤褐	7.5B4/3 褐	良好	摩滅により不明	摩滅により不明	3	数				166	
	198	SA6柱穴	土師器 甕	(10.8)	—	—	7.5B5/4 にぶい赤褐	5B5/4 にぶい赤褐	良好	ハケメ後ヨコナ ゲ	ハケメ ヨコナゲ	2	数	数			93	
p.38 第32 図	202	SA7P*	土師器 甕	—	(6.8)	—	7.5B5/2 灰褐	5B5/2 灰褐	良好	ナゲ	ハケメ	1	1	1		外底面：ナゲ	204	
p.42 第35 図	204	Ⅲ解	縄文 深鉢	—	—	—	7.5B5/3 にぶい褐	5B5/4 にぶい赤褐	良好	貝殻燻灰文 沈線文	ナゲ	2	数			納屋向式 下と同一個体か	210	
	205	Ⅲ解	縄文 深鉢	—	—	—	7.5B5/3 にぶい褐	5B5/4 にぶい赤褐	良好	貝殻燻灰文 沈線文	ナゲ	2	数			納屋向式 上と同一個体か	210	
	206	Ⅲ解	土師器 甕	(18.4)	—	—	10B6/3 にぶい黄褐	10B6/3 にぶい黄褐	良好	ヨコナゲ	ヨコナゲ	1.5	1	1			208	
	207	Ⅲ解	土師器 小型鉢	—	—	—	7.5B6/4 にぶい橙	7.5B5/3 にぶい褐	良好	ミガキ	工具ナゲ	数	数		数	口縁部：縄文	209	
	208	Ⅱ解	須恵器 弁蓋	—	—	—	5B5/1 灰	2.5B5/1 黄灰	整備	回転ナゲ 回転ケズリ	回転ナゲ	1	数				207	
	209	Ⅱ解	須恵器 坏身	—	—	—	10B5/2 灰黄褐	2.5B4/1 黄灰	整備	回転ナゲ	回転ナゲ	0.5	少			基部径 15cm	206	
p.42 第36 図	210	4Tr	土師器 甕	—	—	—	7.5B5/3 にぶい褐	2.5B5/2 暗灰黄	良好	ミガキ	ナゲ	数	数				215	
	211	5Tr	土師器 鉢	4.8	6.8	3	10B4/1 にぶい褐灰	8B/0 暗灰	良好	ユビオサエ	ナゲ ユビオサエ	1	多				216	
	212	8Tr	縄文 深鉢	—	—	—	5B5/2 にぶい赤褐	10B5/3 にぶい黄褐	良好	ナゲ	ナゲ	1	数				219	
	213		土師器 鉢	—	—	—	7.5B6/4 にぶい橙	10B5/2 黒褐	良好	ハケメ ナゲ	ナゲ	2	数		数		221	
	214	土師器 影台	(17.8)	—	—	—	7.5B6/4 にぶい橙	3.5B6/4 にぶい橙	良好	ナゲ	ナゲ	3	2				220	
	215	土師器 甕	—	1.2	—	—	10B6/3 にぶい黄褐	5B5/1 オリーブ紫	良好	ナゲ ミガキ	ナゲ、ハケメ、 ユビオサエ	数	数		数		224	

※胎土 A:宮崎小石 B:長石・石英 C:輝石・角閃石 D:雲母 E:黒炭

第9表 出土石器計測分類表①

掲載頁	図番号	掲載番号	遺構等	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	実測 No.
p. 10	第6図	12	SAS埋土	礫石製品	礫石	14.4	7.1	4.5	89.3		186
		27	SAS床	礫石	砂岩	13.8	6.0	4.8	195.5		247
		28	SAS床	礫石	砂岩	20.4	15.5	10.3	470.0		245
p. 14	第10図	36	SAG床	銅片	チャート	4.2	4.3	0.7	11.4		202
		37	SAG床	礫石	砂岩	17.7	6.9	7.3	1560.0		246
		38	SAG床	礫石	砂岩	10.4	7.2	4.4	474.1	表面中央部に黒色シミ	203
p. 31	第27図	181	SA6上	銅片	流紋岩	4.9	6.0	1.2	28.7		231
		182	SA6上+皿層	石包丁	頁岩	4.2	7.8	0.7	32.0		213
		183	SA6上+SA6床	石包丁	ホルンフェルス	3.8	7.8	0.4	19.9		232
		184	SA6上	石包丁	ホルンフェルス	4.1	7.6	0.5	17.3		233
		185	SA6上	礫石	砂岩	11.8	5.2	3.0	195.5		242
		186	SA6上	礫石	砂岩	10.7	9.6	5.4	736.6		241
p. 32	第28図	187	SA6上	礫石	砂岩	21.3	16.3	9.5	4500.0		239
		188	SA6上	礫石	砂岩	12.6	8.5	7.9	965.0		243
		189	SA6上	礫石	尾崎山礫性岩	4.9	9.6	4.3	266.0		244
		190	SA6上	礫石製品	礫石	6.4	7.8	4.4	62.5		236
		191	SA6上	礫石製品	礫石	4.5	3.8	2.1	7.4		238
		192	SA6上	礫石製品	礫石	12.0	9.1	4.7	107.7		235
p. 33	第29図	193	SA6上	台石、礫石	砂岩	18.5	11.9	6.1	2.2		240
p. 37	第31図	199	SAG床	礫石製品	礫石	14.1	8.6	4.0	126.6		234
		200	SAG床	礫石製品	礫石	8.9	5.1	2.3	22.3		237
p. 38	第32図	203	SA7	石鏃	砂岩	4.7	3.7	0.9	24.2		205

()の値は残存額を示す

第10表 出土鉄製品計測分類表

掲載頁	図番号	掲載番号	遺構等	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	実測 No.
p. 12	第6図	29	SAS床	ヤリガンナ	4.6	1.1	0.4	2.8		248
		30	SAS床	刀子	6.7	1.2	0.7	4.4	木質付着	250
p. 33	第29図	194	SA6上	三典形鉄片	2.5	1.5	0.3	1.1		251
p. 37	第31図	201	SAG床	ヤリガンナ	9.6	1.2	0.8	6.7		249

()の値は残存額を示す

第四章 2次調査の成果

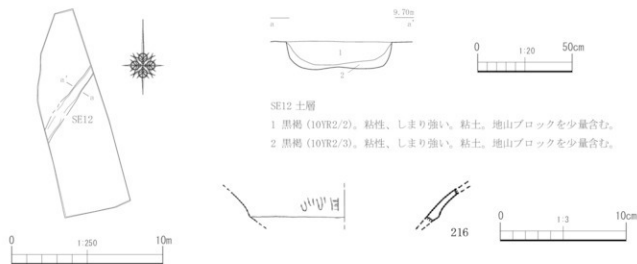
第1節 調査成果の概要

2次調査は外構工事により削平を受ける範囲を対象とした。調査区の基本層序は1次調査A区と共通し、表土であるクラッシャーラン、客土砂の下位にII層が露出する。遺物包含層であるIII a層中から縄文時代後期～古墳時代前期の土師器、石器の出土がみられた。遺物は特に調査区西側にまとまりがみられるが、A区と同様に地形的に西側の下っていることが要因の可能性もある。なお、調査区では北側にも若干の下り傾斜が認められる。III b層上面で遺構検出を試みたところ、溝状遺構1条、柱穴28基を検出した。柱穴内からは土師器の小破片が出土したが、図化に耐え得るものはなかった。

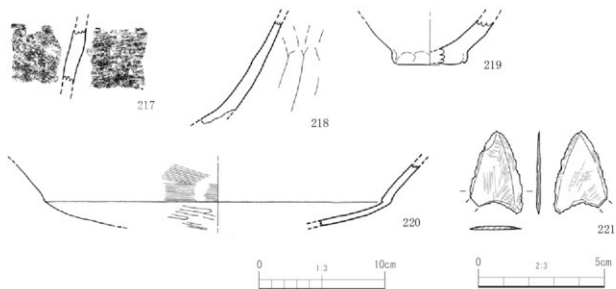
第2節 古墳時代の遺構と遺物

溝状遺構 12 (第37図) 調査区のほぼ中央部で検出された。南西から北東方向に向けて延びており、幅0.56m、深さ0.15mの断面U字状を呈する。埋土は黒褐色粘土であり、レンズ状の堆積が確認できる。埋土中から土師器の小破片が多数出土したが、図化に耐え得るものは少ない。216は土師器高坏である。坏部が開く形態で、外面はハケメ後に縦方向のやや粗いミガキを施す。

包含層出土遺物 (第38図) 報告する遺物は全てIII a層出土である。217は縄文土器深鉢である。表面に貝殻条痕やナデ調整が認められるが、文様は施されていない。胎土の特徴から縄文時代後期のものと思われる。218は土師器甕の胴部片である。219は土師器甕の底部である。外底面に粘土接合痕が観察できる。220は土師器高坏である。坏部は皿形で、口縁部が直線的に外方に開く形態を呈し、坏部外面にミガキが、口縁部外面にハケメ後粗いミガキが確認できる。221は真岩製の磨製石鏃である。基部が欠損しているが、表面に研磨の痕跡が認められる。



第37図 B区溝状遺構実測図 (S=1/250・1/20)、出土遺物実測図 (S=1/3)



第38図 包含層出土遺物実測図 (S=1/3・S=2/3)

第11表 出土石器観察表③

掲載頁 図番号	番 号	遺構 等	種別 器種	出量cm () : 復元			色調		構成	調整		附土 (上: mm 下: 量)					備考	実測	
				口径	直径	器高	外面	内面		外面	内面	A	B	C	D	E			
p. 51 第37 図	216	SE12	土器器 高杯	-	-	-	7. SV95/3 に5い+焼	7. SV95/3 に5い+焼	良好	ハケメ後ミガキ	ミガキ	1	少						281
p. 52 第38 図	217	IIIa層	縄文 深鉢	-	-	-	7. SV94/2 灰焼	SV95/2 に5い+赤焼	良好	貝殻乗痕	ナデ	1.5	微 少	多					283
	218		土器器 甕	-	-	-	SV96/3 に5い+焼	7. SV95/3 に5い+焼	良好	ナデ クズリ	不明	4	3	2	少				285
	219		土器器 甕	-	5. 6	-	7. SV95/4 に5い+焼	10Y94/1 焼灰	良好	ナデ ニビオサエ	ナデ	5	2	多					外底面: ナデ 284
	220		土器器 高杯	-	-	-	SV95/4 に5い+赤焼	SV95/4 に5い+赤焼	良好	ハケメ ミガキ	ミガキ	1	2	少	多				282

※附土 A: 宮崎小石 B: 長石・石英 C: 輝石・角閃石 D: 雲母 E: 黒炭

第12表 出土石器計測分類表②

掲載 頁	図 番号	掲載 番号	遺構等	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考	実測 No.
p. 52	第38図	221	IIIa層	石鏃	頁岩	3.3	3.1	0.2	1.6		286

() の値は残存値を示す

第V章 放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素(^{14}C)の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である(中村,2003)。

2. 試料と方法

次に、測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。

第13表 測定試料

試料No.	試料の詳細	種類	前処理・調整法	測定法
No.1	堅穴建物2	炭化材	超音波洗浄、酸-7631-酸処理	AMS
No.2	堅穴建物3	炭化材	超音波洗浄、酸-7631-酸処理	AMS
No.3	堅穴建物6	炭化材	超音波洗浄、酸-7631-酸処理	AMS

3. 測定結果

加速器質量分析法(AMS: Accelerator Mass Spectrometry)によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素(^{14}C)年代および暦年代(較正年代)を算出した。次にこれらの結果を示し、第39図に暦年較正結果(較正曲線)を示す。

第14表 測定結果

試料 No.	測定No. (PED-)	δ ‰ (‰)	^{14}C 年代: 年BP (暦年較正用)	暦年代(較正年代): cal-	
				1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
No.1	25033	-24.10 \pm 0.21	1905 \pm 20 (1905 \pm 21)	AD 70-125 (68.2%)	AD 50-140 (95.4%)
No.2	25034	-26.01 \pm 0.16	1855 \pm 20 (1853 \pm 20)	AD 125-180 (45.6%) AD 185-215 (22.6%)	AD 80-240 (95.4%)
No.3	25035	-26.01 \pm 0.17	1845 \pm 20 (1845 \pm 20)	AD 130-180 (43.3%) AD 185-215 (24.9%)	AD 80-100 (2.1%) AD 120-240 (93.3%)

BP: Before Physics (Present), cal: calibrated, AD: 西暦

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正している。

(2) 放射性炭素 (^{14}C) 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在 (AD1950 年基点) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は 5730 年であるが、国際的慣例により Libby の 5568 年を用いている。統計誤差 (\pm) は 1σ (68.2% 確率) である。 ^{14}C 年代値は下 1 桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下 1 桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

(3) 暦年代 (Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正することで、放射性炭素 (^{14}C) 年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴの U/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータは IntCal 13、較正プログラムは OxCal 3.1 である。

暦年代 (較正年代) は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCal の確率法により 1σ (68.2% 確率) と 2σ (95.4% 確率) で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。() 内の % 表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、No. 1 の炭化材 (堅穴建物 2) では 1905 ± 20 年 BP (2σ の暦年代で AD 50 ~ 140 年)、No. 2 の炭化材 (堅穴建物 3) では 1855 ± 20 年 BP (AD 80 ~ 240 年)、No. 3 の炭化材 (堅穴建物 6) では 1845 ± 20 年 BP (AD 80 ~ 100, 120 ~ 240 年) の年代値が得られた。

なお、樹木 (炭化材) による年代測定結果は、樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており、樹木の心材に近い部分や転用材が利用されていた場合は、遺構の年代よりも古い年代値となることがある。

【文献】

- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」、日本第四紀学会、p.3-20。
- 中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と暦年代較正。環境考古学マニュアル。同成社、p.301-322。
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360。
- Paula J Reimer et al., (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55, p.1869-1887。



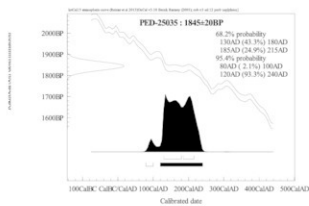
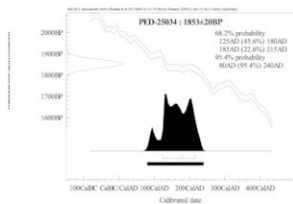
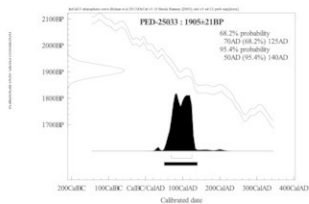
測定試料 No.1



測定試料 No.2



測定試料 No.3



第 39 圖 曆年較正結果

第VI章 まとめ

第1節 縄文時代後期～晩期について

本遺跡からは、Ⅲa層よりわずかながら縄文時代後期の丸尾式、納屋向式、晩期の孔列文土器の出土がみられた。遺構は検出されなかったものの、本遺跡が立地する微高地上当該時代の生活痕跡が認められたことは重要な成果といえる。

※縄文土器については金丸武司氏（本市教育委員会）よりご教示を得た。

第2節 古墳時代について

堅穴建物について 本遺跡からは堅穴建物5棟が検出された。建物の廃棄年代は、貼床面直上の土器を基準として、堅穴建物2が河野編年Ⅵ～Ⅶ期（古墳時代前期前半）、堅穴建物3、4、6、7が同Ⅴ～Ⅵ期頃（弥生時代終末期～古墳時代前期前半）と考えられる。これらのうち堅穴建物3と4、6と7は主軸をほぼ同じくして隣接して造られている点が注目される。両者とも、平面規模の大きなものと小型のものが隣接しているが、土器から推定される廃棄時期はほぼ同時期であることから、2棟隣接して建てられていた可能性が指摘される。

上部が削平されている堅穴建物4以外は、全て貼床面直上に炭化材と焼土が堆積する。また、貼床面直上ではほとんど遺物が残されていない。なお、堅穴建物3は床面直上で完形に復元できる遺物が一定量出土しているが、居住時の状況を保っているとはいいがたく、建物廃棄の際に不要な生活用具を投棄したとみた方が妥当であろう。これらの堅穴建物を、石野博信の分類にあてはめると、堅穴建物2:全炭全焼住居B型、堅穴建物3:残存が悪く分類不可、堅穴建物6:外炭外焼住居B型、堅穴建物7:全炭少焼住居B型となる。したがって石野の解釈を援用すると、いずれの建物も意図的に放火し、上層構造を焼却したものと考えられる。堅穴建物2と6では、炭化材の上に被さる形で焼土が堆積しており、特に堅穴建物2では建物西側の壁面に沿ってまとまった堆積が認められる。どちらの建物も地床炉を有するが、炭化材の上に被さる状況を見るかぎり、これらの焼土を地床炉からかき出したものと判断することはできない。考えられる要因としては、壁面の囲板を固定するための土が内側に崩れて流れ込んだ、あるいは上屋に土を被せていたものが落ち込んだ等の可能性が推測される。また、焼土化していないが、堅穴建物2の南壁面沿いに堆積する6層も貼床面直上に堆積することから、同様の土が崩れて落ち込んだ可能性が指摘される。これらの焼土の由来については、今後の事例の増加を待って検証していく必要があるだろう。

堅穴建物2、3、6では、出土炭化物のAMS年代測定を実施した。測定試料と遺構との関係からは、堅穴建物2と3は貼床面直上の焼却に伴う堆積層中の炭化材であることから、上層構造に使用されていた部材の可能性が高い資料である。堅穴建物6は上層土器溜まり中の炭化物であり、建物本体に由来するものとは断定できない点に注意が必要である。また、第Ⅴ章でも指摘されているように、樹木による年代測定値は伐採年あるいはそれ以前の年代を示すことから、これらを単純に遺構の年代として援用することはできない。実際に、出土土器の編年上の年代観（紀元後3世紀中頃～後半）よりもやや古い年代が得られていることから、いわゆる古木効果が表れていると解釈することができる。

なお、竪穴建物6上層土器溜まりについては、特に中央部分で土器が折り重なって堆積しており、出土土器の編年観が概ね河野編年VI期に収まることから、一括廃棄あるいは比較的短期間のうちに廃棄された可能性が高い。また、貼床面直上の土器との年代差は同時期か土器編年上での1小期程度の差しかないことから、建物の廃棄から上屋の焼却、土器の廃棄までが短期間のうちに行われたことを示唆する。

宮崎県内では、竪穴建物を焼却したと推測される事例は多く確認されている。代表的な事例は川南町赤坂遺跡、湯傘田遺跡等が挙げられる。これらの事例は、集落内の複数の建物が焼却されている点で共通しており、建物の時期も概ね弥生時代終末期～古墳時代前期前半に集中することが特徴である。

集落域について 城平遺跡が立地する微高地は、国指定史跡「生目古墳群」に隣接する微高地上に位置し、さらに東側には東流から南流へ向きを変え大淀川が流れる立地環境にある。微高地は一定の面積を持つが、城平遺跡が所在する微高地南側は2本の谷が入り込み岬状に突き出した形状であることから、この周辺での居住面積は比較的限られている。ただし、平成26年～27年に調査区の南側で実施した確認調査では、北から南側へ緩やかに下る傾斜が確認され、表土下にII層とIII a層が厚く堆積していることが確認された。層中から遺物の出土も認められ、III b層上面で柱穴も検出されていることから、集落域が南側に広がる可能性は高いといえよう。北側については調査事例が無いため集落域の推定は難しいが、地形的に連続することから北側にも一定の広がりを持つと推測される。

さて、城平遺跡から谷を挟んで西側の台地縁辺部に所在する石ノ迫第2遺跡も、河野編年V期をピークとしてIV～VII期まで継続する集落である。石ノ迫第2遺跡はVII期以降に周溝状遺構が出現するが、多数検出されている土坑墓群もV期の竪穴建物を切っていることから、VI～VII期以降に集落から墓域へと変化していることがうかがえる。どちらの遺跡も集落域の全域を確認しているわけではないが、出土土器の編年観からは石ノ迫第2遺跡から城平遺跡へ集落の中心が移動している可能性を指摘しておきたい。今後周辺の開発にあたっては、埋蔵文化財の保護に留意する必要があるだろう。

最後になりましたが、発掘調査にご理解とご協力を頂きました宮崎市立跡江保育所の皆様にご心より感謝申し上げます。

【参考文献】

石野博信 1990『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館

河野裕次 2015「宮崎平野南部における弥生時代後期～古墳時代初期の土器編年試案」『宮崎考古』第26号 宮崎考古学会

宮崎県埋蔵文化財センター 2007『赤坂遺跡』同センター発掘調査報告書第151集

宮崎県埋蔵文化財センター 2007『湯傘田遺跡(第2次)』同センター発掘調査報告書第152集

宮崎市教育委員会 『石ノ迫第2遺跡』宮崎市文化財調査報告書



写真図版

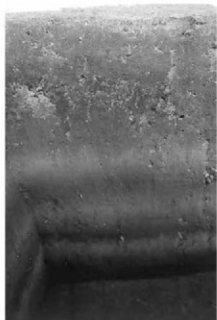
調査風景



城平遺跡空中写真（南東より生目古墳群を望む）



調査区空中写真

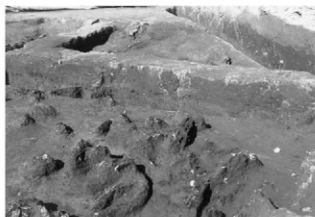


基本層序



竪穴建物 2 炭化材、焼土出土状況（東から）

図版 3



- 1段目左：竪穴建物 2 東西土層堆積状況
1段目右：竪穴建物 2 出土遺物
2段目左：竪穴建物 4 床面遺物出土状況（南から）
2段目右：竪穴建物東西土層堆積状況（南から）
3段目左：竪穴建物 3、4 完掘状況（南西から）
3段目右：竪穴建物 3 出土遺物①
4段目左：竪穴建物 3 出土遺物②

図版 4



竪穴建物 4 出土遺物



竪穴建物 6 上層土器溜まり検出状況 (東から)



竪穴建物 6 床面遺物出土状況 (南から)

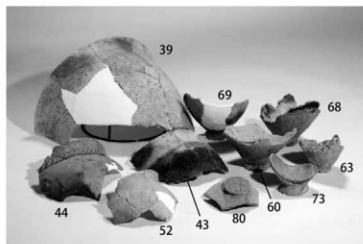


竪穴建物 6 東西土層堆積状況



竪穴建物 6 炉土層断面 (南から)

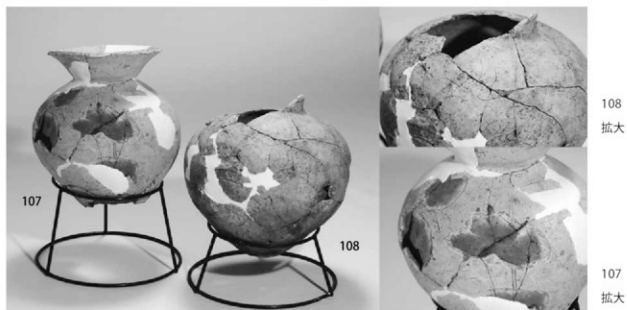
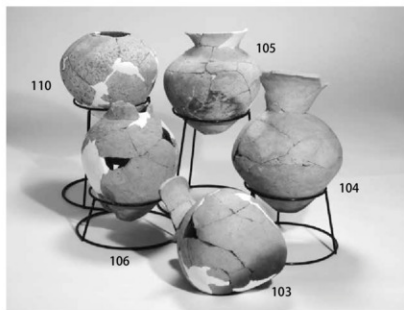
図版 5



- 1 段目：竖穴建物 6 上層土器溜まり出土裏①
- 2 段目：竖穴建物 6 上層土器溜まり出土裏②
- 3 段目左：竖穴建物 6 上層土器溜まり出土裏③
- 3 段目右：竖穴建物 6 上層土器溜まり出土裏④



図版 6



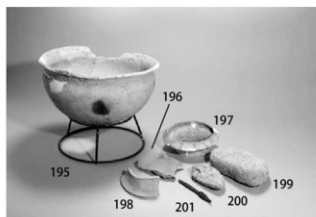
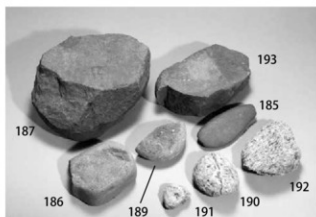
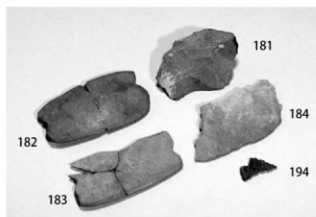
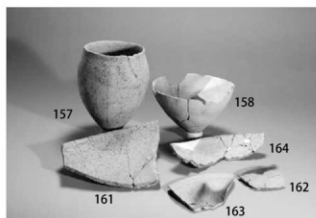
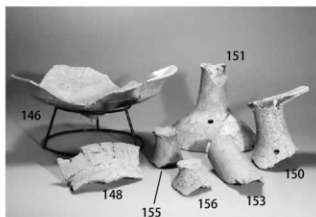
1 段目：竪穴建物 6 上層土器溜まり出土壺②

2 段目：竪穴建物 6 上層土器溜まり出土壺③

3 段目左：竪穴建物 6 上層土器溜まり出土壺④

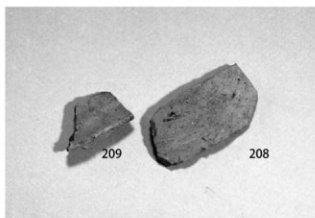
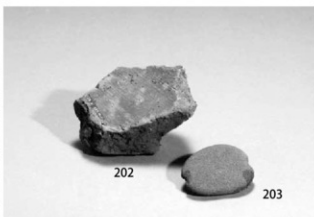
3 段目右：竪穴建物 6 上層土器溜まり出土壺⑤

図版 7



- 1 段目左：竪穴建物 6 上層土器溜まり出土高坏①
 1 段目右：竪穴建物 6 上層土器溜まり出土高坏②
 2 段目左：竪穴建物 6 上層土器溜まり出土鉢
 2 段目右：竪穴建物 6 上層土器溜まり出土器台他
 3 段目左：竪穴建物 6 上層土器溜まり出土石器①
 3 段目右：竪穴建物 6 上層土器溜まり出土石器②
 4 段目左：竪穴建物 6 床面出土遺物

図版 8



1 段目左：竪穴建物 7 床面遺物出土状況（北から）

1 段目右：竪穴建物 7 出土遺物

2 段目左：A 区 III a 層遺物出土状況（南から）

2 段目右：III a 層出土遺物

3 段目左：II 層出土遺物

3 段目右：B 区完掘状況（南から）

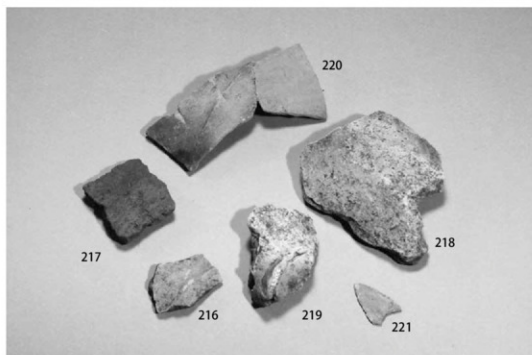
図版 9



2次調査溝状遺構 12 検出状況 (東から)



2次調査区完掘状況 (北から)



2次調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	じょうびらいせき						
書名	城平遺跡						
副書名	跡江保育所整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第115集						
編集者名	河野 裕次						
発行機関	宮崎市教育委員会						
所在地	〒880-2101 宮崎市大字跡江4200番地3 宮崎市生目の杜遊古館 TEL 0985-47-8012						
発行年月日	2017年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号				
城平遺跡	宮崎市 大字跡江2007番 地	45201	24-060	31° 56' 48" 付近	131° 23' 28" 付近	20130819 ～ 20131213 20141201 ～ 20141210	729.8㎡
調査原因	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	
保育所建設	集落跡	縄文後期・晩期				丸尾式土器 納屋向式土器 孔列土土器	
		古墳前期		竪穴建物 溝 土坑 柱穴		土師器、石包丁、磨製石 鏃、蔽石、砥石、鉄製品	
		古墳～古代		掘立柱建物		須恵器	
特記事項	古墳時代前期（3世紀中葉～後半）の竪穴建物5棟を検出した。建物のうち4棟は貼床面直上に炭化材や焼土を多く含む層が堆積することから、廃棄時に上屋を焼却した可能性が考えられる。また、Ⅲa層から縄文時代後期～古墳時代前期の遺物の出土がみられた。						

宮崎市文化財調査報告書第 115 集

城平遺跡

跡江保育所整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2017 年 3 月

発行 宮崎市教育委員会

